女學雜誌

一冊六錢

各土曜日發兌

第百八拾八號

當府內無郵税

郵税五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜　女　學　誌

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 188. NOVEMBER 23TH, 1889.

EDITORIAL:—Prison and Lazar-house. Japanese Prisons.

LEADING ARTICLES:— Relation of Poetry and History.

CRITICAL NOTES:— Criticism on "Three Schools of Modern Writers."

MISCELLANEOUS:—Peace Acts and Regulations in Families. Future great Inventions in the hand of Women. How to entertain Children. Feebleness of Japanese Poems, not the fault of the Poems themselves. Modern Novelists. Question and Answer concerning Pictures. Caution for Painters. Life of Mrs. Fry.

NOVEL:—"The Italian Beauties" (Aiken).

OPEN LETTERS:—I agree with Mr. T. Tamura.

NOTES ON THE NEWEST ISSUES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

SINCE OUR LAST ISSUE.

第百八十八號目錄

社説　監獄は避病院の如し○日本の監獄
論説　詩歌さ歴史さの關係(依田雄甫)
批評　近躰文章三宗を讀みて(落合直文)
雜錄　一家内の治安條例○今后の大發明は女の手に在り○子供の遊ばせ方○和歌の繊弱なるは和歌の罪にあらず○今の小説家○繪の事に付問答○畵工用心の所○フライ夫人傳
小説　以太利の佳人第一回(望蜀)(大沼文哉譯)
寄書　禿筆錄(雁陵居士)○御代の春(今非憂松)
開書　田村武治の君に同意(豊里居士)○水林問題に付きて○男女多少、家族大小○交詢
雜錄　小説及び小新聞○妓樓全廢の大勢○不德の罰昭々○妻自殺す○露美人を葬むる○物慘き見世物○新聞社さ義捐金○願之趣聞屆く○林欽次氏○賄賂事件報告○困難續々○時題流轉○刺客傳
女報　看護婦人卒業○唱歌教員○慈善音樂會○高等師範學校○故天璋院の七週忌○母の務○日本女文人列傳○産科婦人科醫○東京婦人慈善會○其他十一件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Mr. Mishima's "Duty of Mothers," which we reviewed in our magazine, was lately presented to Her Imperial Majesty the Queen, through Viscount Sugi.*

(2) *Mr. G. Takahashi is going to write "Lives of Japanese Literary Women" in behalf of Mr. Griffis.*

(3) *The attendance of the Ladies' Charity Bazaar was 314 on the 14th, 640 on the 15th and 1089 on the 16th, numbering 2043 in all; and the proceeds were 7086.05 yen.*

The same Bazaar kept last year about this time had 3226 attendance during three days, and the proceeds were 7592.715 yen.

(4) *According to the report of the Charity Society of Tokyo Roman Catholic Women, extending from Oct. 1888, to Sept. 1889, there were 9 members with 30 assistants and the money contributed was 107.25 yen besides 10 suits of second-hand clothing. The amount distributed among the poor was 102.10 yen with 10 suits of second-hand clothing. While the world knows nothing of them, they are silently doing good work.*

(5) *In three provinces, Kanagawa, Aichi and Nagasaki, where prostitution is permitted, the proportion of the number of criminals to the population is as follows.*

Year	Population	Criminals	Proportion
1886	2,994,571	24,258	.81 per 100.
1887	3,102,471	23,579	.76 per 100.

In three other provinces Gifu, Wakayama and Kagoshima, where prostitution is prohibited, the proportion of the number of criminals to the population is as follows.

Year	Population	Criminals	Proportion
1886	2,474,694	11,768	.476 per 100.
1887	2,507,934	12,320	.471 per 100.

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

此卵は大鵬と云ふ鳥の卵で
一と度び孵るときは天下第一の惡鳥を出す。
傍らに遊ぶは尋常の雛にて
彼の最と少さき卵より孵へりたる者と云ふ。
左れど先づ世に働くものは力多し
雛にても啄くときは大卵を破るに足る。
大なる害も卵の中に破れば患あるなし。

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百八十八號

明治二十二年十一月廿三日發兌

社説

○監獄は避病院の如し

世は何故に監獄を要する乎、只だ是れ罪を侵したる者を苦しめんが爲め乎、若しくは其罪を惡くゝ思ひ只だ必らず之を罰せんとするが爲め乎。昔しユダヤに奸淫を爲るとき執へられし女ありけり、學者とパリサイの人之れを基督の許に曳き來り、群集の中に置き云ひけるは、師よ、此女は奸淫を爲し居る時其まゝ執へられしものなり、此の如き者を石にて撃ち殺すべしとモーセ律法の中に命じたり、爾は何如に思ふや、基督身を屈め謙くだりて地に物かけり、彼等が切りに問ふにより起きて之に曰けるは、爾曹のうち罪なき者まづ彼を石にて撃つべし、曰ひ了りて復た身を屈め地に書けり、彼等之を聞きて其良心に責られ、老者を始め少者まで一々に出で行き、たゞ基督一人殘れり、基督亦起て女に曰ひけるは、婦人よ爾を訟へしものは何處へ行しや、女いへるは主、誰もなし、基督彼に曰く、我も爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す勿れ。」夫れ人の罪を定るとは基督すら之を爲さず、況んや其罪を定めて之を罰するに於てをや、人は元來他人の罪惡を責め且つ之れを罰するの權あるとなし、何んとなれば他人が十の罪を侵す如く我亦た三四の罪を侵せり、彼の罪梁木の如く我の罪幸にして塵の如くなりとも、既に其罪あるや同じ、我れ其罪の小なるを以て人の罪の大なるを責むると能はず、假令ひ若し我に毫末の罪なしと云へども尙ほ以て人の罪を罰するの權あるとなし、然るを況んや天下一人も義人なく、万人万樣皆な多少の罪惡あるをや、吾等たゞ自己の罪業の除かざるを歎ず、なんぞ敢て他人を責むるとを得ん。

但だ夫れ茲に社會を組織し、國民相ひ約束して共に幸福德善に進まんとするに於ては、其目的を以て若干の法を設け、此法を相守るべきは論なく、苟くも之を侵すものあらば之を相當に罰すべしとの律を定め置かざる可からず、此法律は當世に於ける善惡兩道の道標となり、之より此方に居れば國家の良民となり、此より彼方に行くときは國家の惡魔となる。故に此の律を設くるは兼て網を張置き人の罪を侵さんとするを待構ふるにあらず、寧ろ豫じめ律の恐ろしきとを示し万一の犯罪者なからんとを希ふの主旨也、而して不幸にも律に相當し、正に刑を受べきものあるに至れば、之を社會より捕去つて

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

其害毒を全體に及ぼすを止め、又た此の罪人を一種の避病院に入れて、之を治療すると恰かも傳染病の病人を取扱ふが如くす。扨て之を監獄に入るゝ後ちは之に樣々の教戒を與へ、只管ら其の悔悟を望み、只だ再たび之を眞人間に立反らしめんとを要むるの外なし、故に法律の存するは國家を幸福德善に進めんとするの主旨にして、敢て人を苦しめんとするの主旨に非ず、亦た監獄を設け、懲役を命じ、刑戮を行ふが如き毫末も其罪人を惡くゝ思ふが故にあらず、成るべく之を悔悟せしめて元の人間と爲さんが爲めなり、而して其到底悔悟の望みなく之を社會に放捨すればいよ〳〵毒を流し益々國家全體を害するとの見込あるに至れば、則ち其當人に對しては實に氣の毒にして殆んど忍び難しと云へども、只公衆の爲に忍びて不得止敢て之を殺し若くは流すもの也。母は子供を撫で、又は之を叱る、叱るもの必らずしも撫づるものより愛少なきに非らず、世に法律あり、監獄あり、懲役あるもの本來何んぞ人間を愛せざるものならんや、ダビデ歌ふらく、余れ神の鞭の下に感謝すと、鞭は即ち吾々を直くするもの也。」左れば罪人を取扱ふの覺悟は、左の四則の中ち何れかに歸すべし、云く、

彼の罪は改むるとを得べき乎。

　もし得べくんば、之を改めしめざる可らず　彼は國民にして、同胞なり。

彼の罪は改むるとを得ざるべき乎。

　もし得ざるべくば、之を遠ざけざる可らず　社會全体が害せらるゝを恐る。

之を遠ざくるとは、其罪人をして社會に接近せしめざるの謂ひにて、之に三の仕方あり、殺して世より去らしむると一也、流して遠方に去らしむると二也、入牢して世間より離れしむると三也、然るに死刑流罪は見棄つるの余りに早きとにて寧ろ人間を重んずるの足らざる仕打なれば、文明の漸やく進むと共に漸く之を滅じ、今日に於ては成るべく之を入牢せしめて万一の改悟を將來に佇望するに至れり、而して其の遂に回復の見込なきものは終身懲役となりて一生靑天白日を戴くを得ざるの身分なれども、其間に於て改悟後悔し亦全く元に復るものもあり、況してや、之に種々の教戒を與へ、樣々の方法を施して其善心を召反さんとするに於ては、何如なる罪人と云へども千百中多少の改まるものなきに非ず。

故に、死刑流罪入牢等の多き少きと、入牢中の教戒法何如ん、改悟するもの何程と云ふとなどを見て、其國の罪人を取扱ふの親切不親切を判すべし、特に牢屋即ち監獄の中に於け

る事實を見て、國民道德の高下淸濁を徵すべし。
野博士曰く、古への獄人は病めるものを殺したり、少しく開けてよりは病人を山に棄てたり、更に開けてのち之を一ヶ所に閉ぢ込め置きぬ、而して近世に至り病院と云へるもの出來、此の閉ぢ込めたるものを啻に閉ぢ込めるのみならず、更に之を癒さんとに盡力するに至れりと、罪人取扱の來歷また之に似たり、然らば則はち監獄は今の避病院の如きもの歟。

○日本の監獄

我國は珍らしき慈善國なり、神武天皇以來刑罰の事甚はだ宜しきを得て、天皇の寬仁常に罪囚に及び、未だ嘗て暴逆なる取扱の行はれしとを聞かず、唯一の武烈帝ありしよしに傳し甚はだ苦々しきとに思いたるに、之亦た歷史上の誤謬にして事實上全く斯る事無りしと知られたり、神武帝即位の年罪名若干條を定め、輕重に從つて贖物を徵し、神明に誓つて惡を去り善に遷らしめたり、爾來靖寧、孝德二帝を經て、文武帝の大寶令に至る迄で、今日より一千有余年の昔しに於て、既に罪人を正常に取扱ふの明法存したりしとは、海外現今の諸文明國に於て稀に見る所ろの美談あり、大寶令以后代々多少の改良あり、德川氏を過ぎ、今上皇帝維新の革命を爲し玉へるとき、明治元年正月十七日太政官中に刑法科を置き、附來之を刑法局とし、刑法官とし、刑法省とし、司法省とし、或は官使を香港新嘉舖に遣はして彼地の監獄を視察せしめ、或は監獄則及圖式を國中に頒布し、以后年々多少の改正を爲して、遂に今日の監獄あるに至る。

今日の監獄は夫れ如此にして大に改良したるもの也、之を昔日の牢屋に比較し、彼の獄司奉行が强問の法を以て罪人を調べ、之を火あぶり、磔付けの刑に處したるの當時に思い比ぶるときは、非常の改良なり、之によりて國民の道德が何如に進みたるかを知り得ると共に、亦た政府が何如に人民を重く取扱はるゝかを知るとを得べし。然れども吾人が望む所ろを切言すれば、今日の罪人取扱法は未だ全く可あるものにあらず、尚多くの改良せざる可らざるものあり、之れ獨り吾人が切望するのみに非ず、政府に於ても既に注意せられ居るなり。

凡そ獄制の良きか惡きかを知らんには、入獄したるもの丶改悟すると何如ん、出獄后の行狀何如ん、再入獄するもの丶多少如何ん、入獄中の病ひ若くは死亡何如ん等を吟味するを可とす。

吾人明治十九年度の調査によりて之を考ふるに、在 三

監中に死亡するもの年々に増加し來るが如し、即はち當十九年中既決監に入れるもの六万千百二十一人ありしに、其中ち同年中に死亡せしもの七千五百四十五人ありき、然らば入牢者八九人毎に一人づゝは死せしと也、之れ驚ろくべきとに非ずや、然るに更らに驚歎すべきは未決監中に於ても亦た死人の莫大なりしと也、同年中未決監に入る者八千五百六十一人にして中ち死せしもの五百二十三人あり、即はち十七人毎に一人の死者ある割合なり、凡そ罪状すでに定まりたるものは尚ほ幾分か恕すべし、其罪未だ定らず或は幸にして無罪潔白の正人君子にてありつらん者も、一と度び厄に遭ひ不幸にして未決監に入れるが爲に、其十七人中の一人は即はち牢死したり。而して此の牢死の人數は明治十二三年以后年々に増加したり、其病症の何なるかを問へば、傳染病第一に居り、榮養上發達上の病氣第二に居れり、之れ豈に監獄内の衞生法未だ十分に行屆かざるの證にあらずや。次に監獄に在る中ち幾千の人か能く改悟したりと云ふに、官報之を明示せざるが故に得て其多少を知らねど、入監の節悔悟なし得るの徴候ありしもの百人中五十四人、同じく其徴候なきもの百人中四十六人ありしと云へば、入監するもの未だ悉とく大惡人にはあらざりし也、然るに懲治場と稱し、二十歲以下の少年にして懲役滿期に至り惡心未だ悛らざるもの又は家貧困にして生計の途なく出獄后再び惡意を起すの嫌ひあるものを留め他の監よりも更に鄭寧に保護監督するの場あり、尋常の人民にして其の子弟の不良なるを憂ふるものは殊に請ふて此監中に入れんとを出願する程なれば、懲治場は蓋し總べての監獄中尤も悔悟を起さしむるの効力あるものならん、然るに明治十九年中此に入れるもの七百五十六人にして、內ち善に歸したる者僅かに二十三人あり（而して死亡十二人あり）しと云へば、此監の矯正力も亦た左程著るしきに非ざりしを知る、然らば彼の普通の監獄に於ては、大泥棒も豆ぬす人も、貧にして盜賊したるものも、惡意人を故殺したるものも、相雜居せり、此に入りて改悟し飜然として善に歸するもの多からざると甚はだ明白也、其數甚大ありしとするも七百五十六人の中ち二十三人即はち三十二三人に付き一人の悔改者を得るとも甚はだ覺束なかりしを知る。左れば一度び入監したるものは一層の惡人となりて世に出で、卽はち一層の惡を行つて更らに一層の罪を荷て再び入監し、其負へる罪狀の重きを以て其監に歸るの土產となすが如き悲談なきに非ず、如此んば監獄は實に其矯

正の目的を達せざるのみならず、其結果に於ては寧ろ惡事の種を蒔くに均し、之れ豈に至仁至聖なる我が　陛下の御望みならんや。然るに十九年中新に刑を得たるもの十五万千三百六十九人にして同時に二度以上入監するもの四千〇九十九人ありしと云へり、然らば則ち新たなる罪人六十七八人あると共に舊き罪人の一人は更めて罪を侵し相伴ふて監獄に行く也、之れ何等の悲しきことぞ。此故に明治十九年に於て日本の人口三千五百万ありしとするも、其内十五万五千余人は新に罪を侵したるものあるが故に、恰かも國民一百十六七人ある毎に一人の罪人を出せしに當れり、一の小村にても三四百人の人口あり、此の人口ある村には必らず二三人の罪人を生じ年々監獄に行き、懲役滿期して歸り來るときは又々罪を侵し且つ更に村民を惑わして共に罪を侵さしむることありとせば、我日本國の幸福徳善は果して何處にありや。我等の國如此し而して尚ほ安眠するを得べき乎。

左ば一度び監獄に入りて后ち出獄したる者は、皆な監獄制の改正せざる可らざることを論じ、中には斷然猶つて之が改良に從事せんことを決し、若くは一身を再たび獄邊に投じて其牢番とならんとするものあり、之れ今の監獄に欠點あるを證す義人の最も大なる證にあらずや。

抑そも監獄に行くもの必らずしも大惡人に非ず、或は貧に迫り止を得ずして盗みたるもあらん、或は不圖沸出でたる煩惱に由りて一時思はず罪を侵したるもあらん、或は其幼時より人に教へられたることなく流浪漂泊して良心暗らみ左程とも思はず惡を爲せしもあらん、其他種々の事情によりて罪を爲せるもの未だ必らずしも一々極惡の意思あるに非ず、若し能く之を教戒せば、彼等亦た翻然として善人となるべし、たとひ非常の善人とならざるも一の良民となりて社會に立働らくものとなるべし、之が爲に父母も喜こび、妻子も饑えず、隣人も安堵するに至り、國家に大幸を來すべし、然るに監獄の制宜しきを得ざるが故に、只だに此等の人を悉とく善に反へし得ざるのみならず、其出獄后の惡感化によりて更に世を害せしめんとす、何等の不幸ぞ。

ナポレヲン大帝が暴逆を以て滿天下を覆へさんとするとき、同く佛人にして慈善を以て滿天下に漸道し、行く所ろ帝王に說教し、監獄を改良し、惡人を教化し、ナポレヲンがモスコウに攻め入るとき魯士亞皇太子と共に祈禱し居りたる一義人あり、名をスチツン、グレ、ツトと云ふ、其日記中に云ふ、

ニユーゲートの監獄中女囚徒の居る所へは殆んど巡見の望を遮られんとしたり、諸女囚徒は不法にして妄行甚しければ必ず何か害をなすべしと獄吏は勉めてわが其所に赴くを止めんとなし且強に之を制して秩序を守らしめんと力を盡せしも更に其甲斐なかりし次第なれば少くも衣服を攫みさかるゝの覺悟なかるべからず、されば女囚徒の所爲に就て獄吏は我に對し責任を負ふ能はずと斷言たり、我おもへらく我を此業に召し給ひし主は我が爲に其道を開き我を保護るの力ありとさるにても男囚徒の獄に入ることを得たるは必しも我が女囚徒の獄に赴くべきの道理にはあらざるを考え此事果して主の命じ給ふ服役なるか其證據を授け給へと懇求祈願けるに義務のある所其道明かに我が前に見えければ我乃ち女監の方へぞ足を進めける而して四五百人ばかりなる婦女の爲に設たる只だ一箇處の小庭に出たり、此所にて前にコムプトルスの獄にて我を認れるものに逢けるが彼等は我が來りしことを甚だ喜べる色を見せり但し我を迎ふるため何の用意もあらざれば急ぎ出來るだけの事をなすべしと云ふ、是朝殊の外に暗かりければ女囚徒の起き出る時刻常になく遅くして中には未だ起きいでざる者も多くありたり

さて女囚徒の居る所は長き二室にして臥す時三列にならび或は床の上に眠るあり、或は二列の吊床に入て上下に寢るあり、女囚徒等は直に之を捲きあげて皆々一室に聚れり、我此室中に入りて始は空氣の汚穢によりて殆んど堪へ難く且つ實に醜陋墮落の景狀わが前に群集せる婦人の顏色に顯はれて其無作法なること、大膽なること、言語の妄りなることにより我が靈魂は暫時が程大に驚き懼れたり、實に此時我は主の避所また力にして其眞理は我が盾となることを實驗しけるにぞ益々罪惡の恐しき結果を見此哀なる女人がサタンの謀に陷りたるその墮落の甚しきを思ふにつけても、愈々罪人を救ひ其爲に死んとて此世に降りし基督の愛を感じたり我斯く人の罪を償ふ基督の愛に感動しつゝ演說を始しかば女人の容貌頓に變り、やがて其頭を低れ驕傲高慢の姿も卑くなりて溢るゝ涙を流し大に心の傷める樣をぞあらはしける、我また此獄中には何他の女囚徒ありやと尋ねしに二階に病める婦女數人ありとの答をきゝ階を登りゆきしが我其禍患苦難の累々たるを見て驚き入りしことは言語にたえたる程なり、彼ら多くは重き病なるに敷物もなき床や古びたる禾草の上に臥し、ことに寒き節なるに身にまとへるもの甚

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

渦きを見たり而して獄中にて舉たる子供數人は裸躰同樣の景狀なり。

斯る究困と難苦の住家を去りて我はミルドレッド、コルトなる我が舊友エリサベス、ヂエー、フライ女の許に赴き心に滿るよりして見し儘の事を話し速かにかの哀にも苦み居る子供の爲に何とか至さでやみがたき旨を語げたり、抑も親友エリサベス女は信仰厚く人情深き性質なればわが斯る告訴をなせしは空しきとにあらざりき、乃ち彼女直にフラ子ル數匹を買求させ急ぎ友信徒なる數人の若き婦女を集め只管調製に勉勵せし程に裸躰の子供に被さすべき衣服わまた出來せしかば直に其翌日之を携へて監獄に詣れり、是時彼の女史は獄中の苦しき模樣を見て獄中の憫なる婦人の狀態を改良し若し成すとを得ば其行狀をも改めさせんものをとその爲に計畫をなすに至りぬ。

鳴呼今に於てグレ、ット氏たり、フライ女史たるもの果して何處にありや。フレデリック、ワイ子ス氏監獄史に敍して云く、監獄の改良に同一轍の元因あり、他なし義人が監獄の囚人に對して同情同愛を表するに至れるは、卽はちこれ各國に於ける監獄改良運動の第一着なりと、今日の我國の監獄法にして倘ほ不可なる處ろあらば、士君子は正に其の家宅の整はざる如く、其兒女を遣る學校の劣惡なる如く、寧ろ弱き羊が獅中に混じ又望みある人間が地獄に墮落するを見つゝある如くに感ずべき筈也。ジョン、ハワード曰く、我にもし神の惠みなかりせば我亦彼の監獄の人の如くなりしならんと、君子罪人もと同根なり、君子たるもの安んぞ自ら潔しとして彼の牢獄内の愛憫すべき兄弟姉妹を顧みざる。

論說

○詩歌と歷史との關係

依田雄甫

希臘古代の歷史を知らんと欲せバ Odyssey 或ハ Iliad に若くハなかるべく、支那上古の風俗人情を見んと欲せバ詩に及ぶ者ハあらざるべし、况して我國の歷史を研究せんと欲するもの、我古歌を知らずして止むべき、我國神代より歌ありといへども、之を編纂して一部の冊子となせし者ハ、萬葉集をもて最古るしとなすなるべし、同書に載せたる舒明天皇の御歌に曰く、

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎爲者國原波煙立龍海原波加万目立多都怜國曾蜻島八間跡能國者

此御製の意は「大和ノ國ニハ群山アレド、其中デモ取揃フタル、天ノ香具山ヘ登リテ、國見ヲスレバ、陸ニハ烟霞ノタナビクアリ、水ニハ白鷗ノ飛立チテ遊ブアリ、嗚呼秋津洲即チ大和ノ國ハ、美ナル國ナル哉」といふこととなるべし、此御歌の意は僅か如此ことのみなれども此御歌によりて我國上古には國見といふことを爲玉ふて民間の有樣政治の如何を見聞し玉ひしを知るべく又此頃蜻蛉嶋といひ大和國といひしも單に大和の國のみを稱せしにて大日本全國を指せしにあらざることをも知らるべし、國見の事は神武天皇嗛間丘に登り大和國の形を見玉ふて蜻蛉の臀呫せる如しと宣ひし時をもて初とす○此處にいふ海原とは埴安の池のことなり。

又天智天皇の御製に曰く、

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代從如此爾有良之
古昔母然爾有許曾虛蟬毛嬬乎相格良思吉

此御歌の意は「昔、男山ナル香具山ハ、女山ナル畝火山ヲ愛シト思ヒテ、耳梨山ト相爭ヒタリキ、神代ヨリ如此事アリシナラン、往古ニモ然ナレバコソ、現世ニモ妻ヲ相爭フハ敢テ怪ムニ足ラズ」といふことなり（略解の說悉くは從ふべからず）之を其時の歷史に徵せば、此御歌亦大に寓意ある者に似たり、其故何如となれば、天智天皇の妃に額田王といへる婦人あり、此人天智の皇弟大海皇子とも契りし事万葉にのせたる茜草指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布流といふ額田王の歌と皇弟の答へ玉ひし紫草能爾保敝類妹乎爾苦久有者人嬬故爾吾戀目八方といへる御歌にてしるけし、此御歌は即ち御兄弟にて一人の婦人を爭ひ玉ひし事を寓せしにはあらざるか、此事正史にしるさゞる樣覺えたれば、歷史家の當に注意すべき所なるべし。

此頃の結婚方を知らんと欲せば、日本書紀を見るに如くはなし、書紀を按ずるに天智天皇の皇后倭姬は古人大兄皇子の女にして即ち天皇の姪なり、天皇の御子に太田皇女、持統天皇元明天皇、大江皇女、弘文天皇等ましましたり、持統天皇は御叔父天武天皇の皇后となり、大田皇女と大江皇女とは其妃となり、元明天皇は御從弟草壁皇子の妃となり玉へり。弘文天皇の妃十市皇女は御叔父天武天皇の皇女にして、其母は即ち額田姬王なり。

右は元明天皇の崩後六年を經て養老四年（一千百六十九年前）に成りし日本書紀にしるす處なれば、大なる誤謬なき者と信じて可なるべし、否此書は勅命を奉じて一品舍人親王太朝臣

安麻呂が撰せし者なれば、之を一個の「オーソリチー」となすも、決して不可なきものなり。

之を要するに正史は其外面を記し、詩歌は其裏面を寫す、歷史には後人の筆多く、詩歌は直に當時の感覺を訴ふ、故に史を學ばんと欲するもの、二者を兼ねて知らざるべからず、顧ふに外國の詩を以て外史に益ありとなすものは蓋し之れあらん、國歌を以て國史に益ありとなすもの、僕其人の甚だ少なきを見るなり、蓋し邦人の無知なる、國歌を以て婦人女子の玩弄物の如く思ひ、其歷史に大關係あることを如此大なるを知らざるに由るのみ――嗚呼國歌、國歌豈如此卑下なるものならんや。

◎附記。國史と國語とは日本人の知らざるべからざる者なり、國史は以て我國躰の如何を知るに足るべく、國語は以て國民の獨立を表するに適せり、其國に生れて其國の歷史と言語とを知るを欲せずして、獨り外國語のみを學ぶ、彼去て其慕ふ所の外國にゆくに若かざるなり、余は知る新知識を得んと欲せば、外國文を知らざるべからざることを、然れども之と同時に我史文を脩むることをも忘る可らず、若し夫れ徒らに外國語のみを敎へて、我國語を敎へざらんか、是れ即ち彼を尊び我を卑むの風を養成する者なり、國民の元氣を沮喪する亦大なりといふべし、世の敎育家を以て自ら任ずる者、豈之れが處をなさゞるべけんや、余は望む、諸學校に於て、此二科を敎授せんことを、或人曰く既に之を敎ふと、然れども其實なきを何如せん、聞く帝國大學特約生は國家的敎育を研究すと、余は望む彼等が一大雜誌を發刊して、其主義を天下に公布し、我敎育家をして、大に反省する處あらしめんことを。

批評

○近躰文章三宗を讀みて

落合直文

ミ、ウ、氏とハいかなる御方ならむ、近躰文章三宗といふ題にて、篁村宗、思軒宗、德富宗及志賀宗を論ぜられたり、御議論もいたりて公平に、御筆もきはめてうるはし、大かたよく近躰の文章を讀まれ、またよく書かれたる御方ならむ、さて思軒宗の中に、落合先生の「悲哀」等も多少の相違あれど文格ハ宛然たる思軒森田先生なり」との御言あり、予の身にとりてハこよなき名譽といふべし、さハさりながら、耻しきことながら、面目なきことながら、森田氏の文章といふハ一篇も

よみたることなし、また森田氏と交際したることもなし、(尤もある宴會にて御顔位は見たることあり、又演藝矯風會にて御姿位は拜みたることあり)かゝる始末なれば、いかなる文章を書るゝ人ならむか、またいかなる文章をこのまるゝ人ならむか、今日只今に至るまで知らざりしなり、さるを思軒宗の仲間に加へられたるなど、實におどろきいりたり。

予は幼少より文章をこのみ、讀みもし、作りもしたり、されど古人の文にて、これこそよき手本なれとおもひし文もなく、また自分のかきたる文にてこれこそ滿足なれとおもひしものもなし、されど自から思へり、筆とりては容易に人に讓らずと、また自ら思へり、世間に小文學者はあれど、眞の文章家は現はれずと、又自ら思へり、予の文章は一種特別にて、世間にその例なしと、しかるに今ミ、ゥ、氏の御評を得て始めて知りぬ、予の文章の一種特別ならで、森田氏その人のおはするを、いで報知新聞をとり出して、森田氏の御筆を拜見仕らむ、いで國民の友を繙きて、思軒居士の御文を玩味せむ。

さはいへ森田氏は小說家なり、小說を以て名高き御人なり、予は小說家にあらず、また名の知られたる者にもあらず、いはゞ商賣違なり、されば予をして思軒宗中の人となすも、森田氏にとりて、更によろこぶところなからむ、予もあまりよろこばず、又森田氏をして落合宗中の人となすも、予にとりては更に嬉しからず、森田氏もあまり嬉しからざらむ。

予は嘗て友人より、森田氏の文章論といふをきゝしことあり、その論、予の論といたくたがへり、文章の論おなじからず、いかでかその文のおなじきことを得む、予はミ、ゥ、氏の推擧をありがたくおもふと同時に、猶願はまほしきは、予の文と、森田氏の文とを比較して、そのたがへるところ、その同じきところをくはしく批評し玉はらむことなり。

方今我國の文學社會をみるに、實に錯雜千万なり、文學の一小部分なる小說にはいさゝか見るべき者あるも、文學全躰にいたりては、舊時に比して大差なきがごとし、之を整理し、之を進步せしむる者は誰ぞや、小說をものして口を糊する輩のよくするところにはあらざるべし、況んや西洋小說の飜譯者に於てをや、あなあはれ。

世にあふ歌

世にあふは左樣でござる御尤これは格別大事ないこと

世にあはぬ歌

世にあはじさふでござらぬ乍去是は御無用先規ない事

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜錄

○一家內の治安條例

山下石翁

プーフチンと云ふ人の語に、才氣ある人にても次第なければ其才力の四分の三を失ふと云ふとがある、實に次第…順序と云ふは事を爲すに極めて大切の心得で、此心得が無ければ餘計に忙がしく、左なくばチヤント能く出來得べきとも之が爲めに一層手數が掛つて事務の捗取らぬとがあるです。左れば規則正しき人は仕事を爲るので、不規則の人は仕事に追つかけられて居るのです、我が仕事の主人になると、仕事の奴隷になるとで餘程の相違があります。

此心得は天下を治むるのでも、一家を整ふるのでも同様であるが、取分け一家內の仕事のやうな、最と小さき煩わしきとの多き事柄には、就中此の心得が大切であります、朝何時に起き、夜何時に寐ね、三度の食物は何時に食べ、洗濯は何曜日に、來客は何の日に面會し、運動遊步は何時より、仕事は何時より何時迄で致すと云ふやうに定めて置けば、今日の如き紛々亂雜なる有樣は無いであらう、隨つて一家內の整理能く行き屆き、手數も心配も入費も隨つて大に減るとでありましやう。

固より全體が不規則なので、世の中總じて然る間だに、我れ獨り嚴格に規則を造ると云ふとも、中には出來がたい事情がありましやう、夫は勿論斟酌をしなければ爲らぬとながら、今日の體では、更に順序正しく出來得べきとまでが亂れて居ります、一家外の人との交際に付きてこそ、己れの思ふやうに出來ぬ譯合もあらう、一家內の事を整理するには少しも左樣な掛念は入らぬとです。

今日の下婢は眞の下婢でありませぬが、細君も亦た眞の細君たる心得が無いです、下婢も亦た人の子なれば同じ程に眠むたく、同じ程に遊びたいでせう、否へ彼は一層に左樣感ずるであらう、夫を何か一種變つた人間のやうに取扱ひ、夜は最も遲く眠らせ、朝は最も早く起し、終日少しも遊ばせずに置て年中終日同一に働らかせようとするは慘酷の至りです。若し左るとなく細君の心得が整のひ、一家の有樣が規則正しくあれば、自から下婢自身の事をする餘裕の時間が出來て、其間には自分の仕事をするとか、又は樂しみに平易なものを讀むと云ふやうに成りましやう、斯るとなくて細君はいつも鞭を挙て叱る心地にあり、下婢は始終頰を脹らまして目を窃むやうにあれば一家內の仕事はいよ〳〵亂れて來ます。

田舍の諺に、田植前には休むと云ふとがあります、人間は徒角樂しみ遊ぶと云ふとが無ければ勉强も出來ぬものです、細君が下婢に對する心得は深く此の一理を味はひ居るとであります。

○今后の大發明は女の手に在り

みどり

或る書生は歎きました、古人が既にアメリカも發見して仕舞ひ、蒸氣も發明して仕舞ひ、電氣も見出して仕舞ひ、大抵の哲學も研究して仕舞ひ、進化論も大丈夫となつて仕舞ひ、凡そ學問上でも、事業上でも、目覺しき大したものは既に皆な人に仕て仕舞はれた、今日我々の爲す領分は殆んど其の大仕掛中の小さき部分で、僅かに之を繕つて見たり、補なつて見たりするに過ないと、斯く歎息しました。

然し能く考へれば今日でもまだ〳〵發明發見する事柄が多いのでしやう、が幾分か此の歎息も無理は無い、即はち古人既に目星しい所ろを見出して仕舞つたれば、今人は先づ其の目立ぬ所ろに注目して細事を發明するに止まるです。

然るに今日迄の發見は總べて男子の爲たとて、即はち男子の注意し得べき方角に於て發見が在つたのです、女子にのみ氣の付く點に於ては古來未だ注意した人が甚はだ少ない、故に之より目ざましひ發明の起るのは女子の領分であつて、而して此の發明をするのは即はち女子の手にある。

一家の事でも、一國の事でも、小さきは料理、取締の工夫より、看病、慈善、敎育、美術等の事柄に付き、目を放つて見れば更に發明すべき點が多く殘つて居りましやう、之は男子が見逃した所ろで女でなくては目の着かぬ點です、今后女の方々の親切なる注意深き目に當つて初めて見出さるゝものである。

御婦人方少しく獨立發明の心掛をお持なさい。

女性中のコロンパス、ニウトン、ワツト、フランクリン、ダー井ン、ソクラツト、プラトとは多く一家内の事、又は慈善、看病、美術、敎育等の上に於て發明をするものでありましやう。

○子供の遊ばせ方

一人の母

「子供は何の用をも爲すまじ、左れど后には大人となる」、の一語は、子供を遊ばする人々の深く覺え置べきとて、苟くも此一語を味はぬ人は、子供を立派なる人物に仕立上げるとが出來ぬです。

一　遊びは子供に大切な仕事で、寧しろ遊びと云ふよりも其の學問と云ふべき程の者なる事。

二　遊びには連れを要す、連れは親たるもの善く心掛けて

撰ぶべし、尤も良きは親が子供の遊び連となるにあり、左樣の時には眞とに連となり、決して之をヲモチヤにすまじき事。

三　遊び道具を與へ、其取しまり方は子供自身に任すべし、子供が取亂すを常も母親が方付る時は、總て人が方付けくるゝものと心得、子供の覺悟に惡しき感化ある事。

四　少々危なき遊びは爲ても強て止むべからず、尤も一應は用心せよと言きかし置べし、斯て聞入れず自分にて少しにても危我を爲さば、寧ろ之をあはれみて慰さむべし、然すれば子供は全く自分の悪しかりしとを悟り、深く後悔して后日の爲になるべし、此時若し叱り罵れば反つて負惜みの氣を起させ、經驗の益を得させ能はぬ事。

五　人形にても何にても子供が好むものは、たとひ古くあるとも其儘に持たすべし、傷けたりとてズン〳〵取かへ遣れば、此子后日あはれみなきもの、儉約を知らぬものとある事。

六　ヲモチヤ屋に近く住ふまじき事、いろ〳〵の害あり。

きける儘、かきつゞけて覺となし、又人に示す。

雨荒園菊枝々痩、霜染江楓葉々丹。

○和歌の繊弱なるは和歌の罪にあらず　其川子

和歌は繊弱なりとは誰も云ふ事あるが是れ和歌の罪にあらずして歌人の罪なり。所謂日本の歌人とは堂上にあつて月を玩そび花に戯むるゝの徒なれば此肺腑より如何にしても豪壯なる句の出づべしとも思へず、秋の牡鹿やましらの聲のみか三月の花を見るも九月の菊を見るも嬉しいにつけ目出たいにつけたゞ心細くなるのみなれば如何でか人を感動すべき壯快なる句を吐くを得ん。殊にひたすら姿のみ安らかにせんと先人の遺法を墨守し語格に拘束し紅葉は龍田川花はみよしのに限る如く。苟くも其範圍を脱すれば其道の惡魔の如く罵り退ぞく。是れ和歌が漸次に衰亡して終に今日とありし所以にして悉く歷代歌人が罪といふべし。和歌の調は極めて繊弱に失したりと雖ども若し其壇上にミルトン或はウォルズウォルスの如き宇宙の大觀者出でなば何とてかゝるものにて止まる事ならんや。慷慨の士が事に感じて知らず〳〵口より出でし句には往々士氣を振起する壯快なる氣象に富むものあり。三河人松平上野介が作りし左の如きその一例ならんか、

野春雨

武夫のかばねさらせしいにしへを忍ぶ荒野の春雨のころ

勝軍行

たかひもにかけしかぶとの鍬形にすがる蝴蝶やいもが魂

此調は元より高からねば到底專門の歌學者流の句と全一にしがたけれどしかも勇壯の氣は文字の上に溢れたり。もし如此きの人深く歌道を究めば和歌何とて纖弱に陷るの嫌ひあらんや。香川景樹千種有功等の如き少しく時流を脱せし人は皆異端なりとて世に容れられず、和歌が衰弱も又怪しむに足ず。超凡卓絶の人は何とて先人の敎に唯々從ふのみならんや。

○今の小説家　　　かすみ

……偶と万世橋の畔りに出ました、行通ふ人は千態万狀で、或は髯反らせ肩怒らせ靴音に鋲子とりて濶歩あさる紳士もあれば、よろ〳〵と老ぼれ額ひに波〳〵ならぬ苦痛を印し辛くも杖にすがりつゝ馬車に驚ろかさるゝ老人もあり、極純粹の書生即はち衣骭に至り腕スチッキを握る極正銘の壯士もあれば、少しく毛が生へたか先づ日影町の洋服と云ふ着風の半書生もあり、更に進化したる半敎員的の書生もあり、一層に進みて新聞記者たらんずる卒業生もあり、洋裝の貴婦人、和服の奧樣、走る丁稚、つまづくパアさん、わめく馬丁、罵る車ひき、大聲の物賣り、中聲の講釋、小聲は固より聞えず、万人皆な先を望みて宙に馳り、右往左往、紛々雜々、肩摩轂擊して罵り合ふも奔走の中なり。

時に目鏡を掛け首を傾むけ筆を握つてセカ〳〵しつゝ之を寫す人あり、承はるに春の舍君なるよし。傍に身を搆へ此樣を見ては時々下に打向き又た空を望み嗟歎する氣色にて思出しつゝ緩〳〵筆取らるゝは美妙齋君あるよし。彼向の隅に仁王立み立ち恐ろしき眼光にて此の躰を睨まへ慨然として一句を草し又にらまへギヨロ〳〵として又一句を認ため全身コブを生じ產みの苦しみを爲すの批評家あり二葉亭主人なるよし。傍らに伴つて同じく此方を視察しつゝ時々二葉亭とさゝやきズット身を反らして天の一方を望み折々涙をこぼして何か寫さるゝ如し特に子供に目を付くると忽まち氣嫌よく自然と窮屈を棄て面白さうに筆を走らす人あり嵯峨の屋氏なるよし。此等諸々の筆とる人を吟味し又立まはる万人の躰を考へ兼て持參したる原稿をそこ此處と改たむる人あり南翠外史あるよし。笑ふでもなく笑はぬでもなくチカしく愛嬌をこぼしてスラリ〳〵見て廻る傍はら、大學の洋服デク〳〵膨れ無頓着無用捨に談笑し時々同行者の袖を引て共に注目し高か笑ひする人あり、其一人は篁村氏にして他は紅葉山人なるよし、何れ

歸宅の上筆を執らるゝと見えたり。玆に若々しき樣子にて此境を通行し、彼は何方、此は何方と承はりて、歸社の上へ斯く記るしとめて則はち此文となせり。

○繪の事に付問答　　白然道人

問　畫に二つの大切のものあり、何乎。　答　形と色

問　畫工が第一に注意すべきとは…。　色の過明と爲ぬ樣

問　然らば色の過明の畫に名作なきか。　全く左樣にも非ず

問　斯る類の畫にて名人は何人有乎。　古より十人程あり

問　畫工の彩色論に二ある由何に乎　似寄りたる色を合せて調和を得べしと云ふ說に、反對の色の釣合にて調和を得べしと云ふ說。

問　色の種類に寒類溫類ありと何如　赤、橙、黃は溫色と、青、綠、スミレ色は寒色とす。

問　繪畫上の調和を學ぶ最良法何如　名家の畫を學ぶ事

問　其の調和と云ふは何如なる事乎　色取り方の關係

問　西洋畫にて墨色と云ふは何に乎　色の濃淡の關係

問　墨色に必要ある心得は何にぞや　主本色即はち主なる全體眼目の色に總べての色が能く對應するなり。

問　或る一畫の精髓とも云べき點は　光線を發す要心點に近き所ろの淡色なり、此淡色を精髓とし（音樂にて喩ゆれば原音とし）之を原ひとして全體の色合を評す。

問　總べての物體に濃淡の別ありや　何如にも尤も明るき點と、尤も暗き點と二つあり。最濃點、最淡點。

問　濃淡の別を爲すは何故へ大切ぞ　光線に濃淡を別ちて其物の體を浮みて實在する如く見する故也、英語にて之をチエロスキユラと云ふ。

問　光線の濃淡を用ひぬ畫繪ありや　埃及日本支那の畫

問　パースペクチーブとは何の事か　先づ遠景寫法と云へり、之に二つあり、遠きものほど小さく見せて寫す法と、遠くあるほど色を渺くして見する法と。此の二法により、遠ざかるに隨ひ物形の外線を曖昧にし又其彩色を少しく變ずるあり。

○畫工用心の所　　十一寸月人

佛國革命后に一畫工あり名をイサベーと稱べり嘗つてブエンナ會議の模樣を描畫せんとをウエリントン將軍より依托されたれば先づ其實景を觀て后ちに筆を下ろさんものと思ひ早速に行裝を整へ來つて告別しければ將軍は平易く承諾せるを悅び且是に告げて曰く「余は御身がブエンナ府に到らば當に議

場の外觀を描くに止まらずして室内の裝飾より當日來會せる各國公使の肖像に至るまで悉ごとく摸寫せんとを望む而して會議の主坐は勿論余の占むるところ蓋我が命じて御身に畫かしむるものにして余の所有品たればなり」と此時傍らに閑居たる佛國公使タレーランドは畫工を睨視して「イサベー君…君は余が當日佛國の全權を代理して將軍と共に會議に臨席したるを記憶するならん然らば君は佛人にてありながら余を擱いて他國公使を首坐に畫くと能はざるべし若然せんとならば余をして全たく其中に在ざらしめんとを望む」茲に於て畫工は其何れに決して可なるを知らず心配工風して數ヶ月の后漸く一額面を完成せり其圖を視にタレーランドは議場の中央に端然として着坐すれども將軍は今將に悠々として議場に入らんとするが故に衆目皆此一點に注ぎ居れり。將軍は之を得て深くイサベーの頓才を賞し直に英國に齎らし死に及んで之を子孫に傳へたれば今仍ほ秘藏して氏が遺物の一なりと聞く。

○フライ夫人傳

大沼文識譯

慈悲の目ょにくしさ思ふ人はなし科ある身こそ猶哀れなれ今や外道に彷徨ふの姉妹を正路に導き世海に漂泊するの兄弟を扶助するは苟も人たる者の本分なりさは世上一般の是認する處なり於是乎各人壯大確乎さして之れに努力するある而已ならず厚情なる婦人仁惠ある男子協力同心以て犯罪失心の粗糠より神聖の穀粒を篩ひ出さんさ結社する者少からず或は悖逆無頼の徒を感化するの結社有て彼の年少の破落漢の如き若し放擲顧みざるの時は方に鐵鎖の其足に繋がり終には進んで絞架上に登る可きも爲めに能く善良の子弟さなり或は專ら免役の囚徒に正業を與え以て再び安然世路に旅行せしむるの同社あるに至る嗚呼如此き結社の社會の弊害を除去し其幸福を増進するの大なる果して幾何ぞや實に之れが操興者たる淑女君子の名譽も亦美且つ大なる轍宜なり其社員の年々歳々増加し來つて其勢力を及ぼすの範圍も亦愈々益々廣大たるに至る豈に偶然ならんや。

然りさ雖今より殆んご六十年前の社會に在ては未だ斯る美擧あらざりしなり此時に當てや彼の年少偷兒の夙に幼時より罪惡不徳の間に養成せられたる者恰かも大學々生の其課程を卒業したるが如く一旦一罪案を卒へ爲めに牢獄に入つて其位地を占むるや此に尚ほ犯罪學熟練の大博士許多ありて大に之が薄學淺才を憐み懇ろに教授して以て益々其奸策暴虐を進歩せしめ又可憐の少女一朝の迷夢に其心事を頽壞し哀れ獄舍に繋がるゝや獸心女身の怪物群集し擅まゝに其妖術を逞しふし以て終に之をして心身共に已等の如く變化せしむるに至る實に當時未だ囚徒の分類これなきが爲め若輩は老者の腐敗する處さなり新參者は重罪人の教を受け恰かも時疫の媒介物に依て益々蔓延するが如く囚徒互に相交通する故を以て罪惡の慘毒愈々傳染して其勢底止する處あらざるなり嗚呼當に是れ女性の「ホーワード」たるフライ夫人が奮勉努力千苦を厭はず万艱を避けず而かも其企圖の危險なるに屈せず日に晦澹たる牢獄に出入し無賴の囚徒を或は教へ或は慰め終に一大事業を成功し以て人類中最大貴正なる一恩惠者たるの名譽を得たるは實に此の時代に在りさす。

抑も夫人はジョン、ガーチー君の女にして千七百八十年ノールウイッチ近傍アールハム、ホール、に生れたり幼にして同情敏捷殊に窮困者を愛くしみ被災者を憐み長ずるに及んで爲めに其子弟を徵集し一の貧民學校を設立し自ら之れが教育の任に當れり而して此間幾困難の生ずるあるに拘らず遂に其忍耐力及び厚情の有るあつて能くこれが美果を結ぶを得たり後千八百年夫人は龍動の銀行者ジョセフ、フライ、君に婚嫁し多年交友會の會員さなりて該會の煩務を輔け屢々公會の演壇上に登り以て會員中屈指の一たるに至れり然れごも夫人が一大事業を起し芳名を千載の下に朽ざらしめたるは纔れ時千八百十二年「ニューゲート」牢獄改良の事さす嗚呼今や整然たる該牢獄を巡回する人は實に當時の景況万分の一だも想像し能はざる可しそも當時其結構たる殆んご四百八十の囚徒を容るゝに足る可き建築たるに之れに繋ぐに殆んご八百名の多きを以てせり於是乎囚徒の醜行惡習百出して禁ず可からず殊に女監の如き見聞に堪へざる者あり無慮三百の女囚は其罪の有無を論ぜず其科の决未决を問はず一括して盡く二小房及び二病監中に堆積せられ總て均しく不德の風に晒されたり然り而して夫人が勇敢一大改良策を運行したるは實に此の憐可き女囚徒の間に在りさす今夫人が此に於て遭遇したる景況の記錄あり左に、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

狹隘混雜の間囚徒等は或は朋友の訪問に應接し或は多數の子女を養護し或は料理或は洗濯實に其寢食共に此に於て行ひたり或は時に一病獄中百二十名の患者數くに席だになく皆地板上に横はり加之ならず其過半は裂れ身に纏ふの衣だに全からざる者あり又彼等囚徒は公然火酒を傾け踏々跟々天を嘲り人を譏り其聲囂然として此の高尚潔白なる貴夫人の耳朶を破り嫌厭す可きの惡臭は紛々獄舍に充滿して嘔吐を催し獄吏の如きも敢て之れが檢視するを好まざるに至る於是乎夫人の初め此處に來るや典獄夫人に勸むるに袖時計を官室に置き而して巡視す可きを以てす然らずんば囚徒の之を奪ふなきを保せずと嗚呼甚しい哉醜行卑賤の吾人々類の天性を滅却し感情を破壞する現に二婦人の手に衣を着せん爲め無慘や死子の衣裳を引き剝ぎたる者あるに至れりと。

以上の記事こそ實に當時醜行不德の巣窟たる「ニューゲート」の眞相と云ふも豈に決して失當ならんや況んや夫人自らも亦之れが景況を人に語つて云へるあり曰はく今妾の君に語る處の者は纔く實景なり即ち斯芥。客房の狹窄。相互に對する婦人の暴虐なる態度殘忍なる言語及び其不信心なる實に言語筆紙の盡くす處にあらずと亦以て當時を知るに足る。

吁輝々たる仁愛の光如何に未明の暗澹たるも豈に之を照し破らざらんや全く夫人が奮發努力の然らしむる處數年を出ずして之れが状況盡く改良せらるゝに至り囚徒等此に始めて多年の迷夢を覺破し眞正なる仁慈恩惠の方に己れ等を救ひ上げんとし來りたるを知り又淑女等は激昂して相ひ集り監獄協會なる者を組織し以て益々改良に奔走盡力せしかば殆んど殘忍無情救ひ難しとせし彼の囚徒も亦尋常人種たらしむるを得たり嗚呼誰か云ふ罪惡の叢棘中神聖の種粒なしと既に夫人の社會の福利を與ふるの大なる果して幾何ぞや夫人傳記者の一人其功德を記して曰はく抑も夫人の不幸者を測量するや固より好奇の爲めにあらず又哲學的の觀察にあらずして一に之を救助せんとの誠心より發したる者なり於是乎只だ天を侮り神を蔑したるの輩は之を讚美するの辭となり人を害し物を盜むにのみ用ひたるの手は爾來正業に使ふの手となり罪惡に生れ醜行に養はれたるの少年も爲めに本性を破滅するに至らず益々改良の途に進み又日に狂亂忘情の外見る可きの物なく耳に罵詈喧鬧の聲々たる外聞く可きの聲なき彼の牢獄の状況も漸く謹肅整齊たるに至れりと實に夫人の如きは千古の聖人と謂つ可し。

夫人終りに臨む迄其慈惠事業に盡力し終に千八百四十五年溘焉として逝く歲實に六十有五。

小說

○伊太利の佳人　第一回　望蜀

ゲーテ著　愛軒居士譯

時期は知らず何時の頃にやありけん伊太利の港街に住める一人の豪商ありけるが幼より怜悧にして勉勵衆に超へ剩へ航海の道に通じければ常に自ら「アレキサンドリア」に航して高貴なる物品を買入れ又は交易し然して後再び之を我商店にて賣捌き或は之を歐洲北方の地へ運輸して巨万の富を積み財貨日を追ふて殖へければ今は商買を無上なき樂となし無用なる遊興に時を費すの暇とてはなかりき斯くて五十歲に至るまで倘ほ怠らず其業を勉めけり凡て靜坐して業を執るの人は一家團欒の樂を以て其生活を香味つけ愉快なる月日を送るものなれども起居定まらざる航海者の常として一家團欒の樂も心に止まらず隨て以太利婦人の秀逸佳麗なるも豪商の心を動かすこと少なく豪商が此等の婦人に對して注意を惹起するは只だ婦人等の裝飾品の嗜好を察して時に應じて之を利用するの一事なりき。

或日豪商は十分船に荷を積みて鄕里なる港に着せしに恰も祭禮の日にぞありける此日豪商の意思に大なる變動の來らんと

は人も知らず豪商自らも實に豫想の外なりけり抑も此祭は殊に幼兒の爲に年々一度此町に於て催され數多の童男童女は競ふて異樣の衣服を着け或は列を整へ神輿に扈從し或は兩々三々群を爲し町内限なく噪ぎ廻り後には廣き野邊に出て樣々の遊戲を催し儀式正しき競技會を設け日頃長ずる技藝を顯はし我こそ敵に打勝つて一定の賞品を得んと勉めけるは實に君子の爭とや云ふべき。

始のほどは豪商もたゞ何となく愉快なる心地にて此祭禮の中に混じけるが幼兒の樂は云ふも更なり兩親が打喜ぶ樣を暫時の間觀察し此く多くの人々が今眼前に幼兒の遊び戲むるゝを見て最も愉快を感じ又未來には幼兒の行末を思ひ最とも愉快なる希望を懷くを見出しては豪商も我身の上に立かへり我寥寂なる情態のいとゞ著しく眼に觸るゝこそ道理なれされば豪商は家内の空虛なるを見て始めて苦痛の思を爲し自ら其感情に訴へたり、

アー我ほど不幸の者は世にあらじ何故に斯く眼の開くとの晩かりしぞ何故に此の齡に至るまで人間を幸福ならしむる唯一の財貨を知らざりしか思へば今日まで爲せし困苦も少なからじ逢ひし危險も多かりし斯くまでの困苦と危險とは果して我身に何程の物をか與へたる假令我倉庫は商賈品の山を爲し我箱には寶石充ち我棚には珠玉溢るゝも此等の財貨は我心をして爽快ならしめず又滿足ならしめず渠等は積むに從ひ益々其朋友を求むるが如く一の珠玉は他の珠玉を請求し一の金塊は他の金塊を請求す渠等は我を主公と思はず常に我に向つて呼びけるは行けよ早く行け而してなほ我等の同輩を携へ來れ黃金は黃金の來るを喜び珠玉は珠玉の來るを喜ぶとも我生活は終始渠等の爲に束縛されたりされども余は漸く感じたり此の如き生活に果して何の樂かある氣の毒ながら今ははや年も長けたれば少しく思ふ心の起りしぞ余は今我身に向ひ言ふとあり汝は如此財寶を有するも何の快樂をも得るとなきぞ汝の死する後とても誰ありて亦た之に依つて快樂を得るものあらんや汝は曾て其財寶をもて一人の嬌嬈なる婦人を裝ふたるか汝はそれをもて一人の娘子の爲に嫁入の準備を爲したることあるかそれをもて一人の息子の爲に溫和なる處女の戀情を得て之を鞏固ならしめたることあるか決して然る事なかりしにあらずや汝の財寶は總て汝の有なるべしされども汝の親族は一人も之を得るものなく汝一朝此世を去らば汝が刻苦流汗して聚蒐したる

物も皆因緣なき他人の手に落ちて全く消費し盡さるべし。

アー逆へば逆ふものなる哉今宵食卓の周邊に小兒を集め其長所を賞めそやし善に勸むる兩親の幸福は如何ばかりぞ彼兩親の兩眼には如何なる喜樂の光線が輝くぞ又彼小兒の中よりは後來如何なる企望の湧出るが如くに見ゆるぞやさるにても汝は如何程の企望をも攫むと能はざるか汝は既に白髮の老翁なるか汝は未だ人生の晩に到らず今に於て己の怠慢を知るは尙ほ十分には非らざるか今に於て家婦の事を考ふるも決して愚なるとならず汝の財貨あれば必らず順良なる妻を得らるべし又其妻を幸福ならしむるを得べし汝は婚姻の晩きがために若し子を得るも亦た晩かるべきもそは却て汝は最も大なる快樂を得るの種なるべし世には餘り年若くして子を天より授かりそが重荷となり一家の混亂を招くも多きぞや。

豪商は此自問自答によりて自ら目的を決定め兼て心しりの船仲間二人を呼んで腹藏なく我思想を告けるに固より此二人の者は常に唯々諾々として何事も豪商の意に從ひければ此度とても直に其命に應じ走りて市中に到り最も年若ふして最も美麗なる少女を探索せり豪商自らも其熱心は少しも使者に劣らず自ら行き自ら向ひ見もし聞きもし暫時の間に望む所のものを見出たり今見出したる少女は其瞬間時に在りては市中第一の美人と名づけ得べし芳齡凡そ十六ばかり身躰強壯にして善良なる敎育を受け姿容進退兩つながら最と愉快に見へけるは實に當時第一位の佳人なるべし。

されば豪商は人をもて結婚の旨を申入けるに固より富裕双びなき豪商の事にしあれば此結婚の約一度整ふ時は佳人の身にとり夫の存命中は言ふに及はず其死後たりとも幸福なる境遇に達するはいと明なるものから相談頓に一決して直に盛大なる結婚の式をぞ擧行しける其日より豪商も始めて眞に我富を有するの心地し且つ之を樂むの感情起りけりそれより美麗清潔なる物質を擇びて嬋娟たる佳人の身躰を裝飾しけるに寶玉も我最愛の妻の胸邊或は頭髮の中に在ては之を曾て寶庫の中に在る時に比すれば一種特別の光澤を發し金環も最愛の妻の手にありては其手より無限の價値を有する事とはなりぬ財產も今は之を消費して他人に分ち與ふるがために却りて自ら增殖するが如くに見へ豪商も自ら富たりとの感情を起せしのみあらず舊時に比すれば一層の富裕となりたるが如くに感ぜり斯く夫婦は大凡そ一年の間互に睦しく最と滿足に暮し豪商も

東奔西馳する活潑なる生活の快樂をもて一家團欒の幸福の感情と交換したるが如くに見へたりされども永久其身を終ふ習慣は斯く容易に掃ひ去り能ふものあらず吾人の夙に採りたる方針は恐く一時は他の方向に傾くるを得るも全く之を中絶するは決して爲し能はざるの事なり。

彼の豪商も他人の船に乘込み又は無難に歸港するを見て舊來の情再び我胸中に勃興するを感ぜし事も屢々なり加之家内に在りては我最愛の妻の側にあるも時々不平と不滿の情の起るも多かりき豪商の願望は日々に增長し後には願望變じて忍びざるの戀情とあり世上亦た我身の如き不幸ある者はあらじとまで感じ終には實に病氣となれり。

寄書

○禿筆錄　　雁陵居士

第一　處世の秘訣

帽を被らず靴を穿たず錦衣玉食せずして予は天下の英傑なりと云ふは徒らに嘲笑を招くのみ衣冠儼然鬚髯蓬々たれば予は無學無識の一凡人なりと言ふとも世人の尊敬を失ふとなし是れ處世の一秘訣なり。

第二　滊車に乘るには

決して下等室に乘るを勿れ若し多言なる書生が乘り居る時は忽ち世間に吹聽して某氏は下等室に乘り居たりと言はん實に冷汗淋背的の事にあらずや。

第三　人に信ぜらるゝ方法如何

未だ人に信ぜられざる間は沈默すれば出の如く辨論すれば輕躁に似たり既に人に信ぜらるれば沈默するも賢明なるが如く辨論するも賢明なるが如し人に信ぜらるゝ方法如何鬚髯を飾り衣服を飾り言語を飾り擧止を飾るに在り偏屈なる學者は人に信ぜらるゝは眞實に在りて僞飾に非ず抔と言へども決して然らず。

第四　人に尊敬せらるゝ方法如何

尊敬して聽けば如何に平凡なる陳腐なる議論にても名論卓說と感じ輕蔑して聽けば如何に剴切なる卓越なる議論にても疎妄迂濶なるに似たり人に尊敬せらるゝ方法如何頭を飾り肩を飾り腰を飾り足を飾り一瞥欬一欠伸も亦飾るに在るのみ所謂天眞爛熳は處世術に於て第一の禁物なり。

第五　先づ人物を一見して後其文章を讀め

未だ作者の面を知らざる間は非常に感心して讀みたる文章も一たび作者の面を知りて後は其文章の平々凡々たるを覺へ毫も感心せず殆んど前日感心して讀みたる所以を自ら解せざることあり、未だ作者の面を知らざる間は其文章の平々凡々たるを覺へ念を入れて讀まざりしも一たび作者に逢ひて後は丁寧に一字一句の意味を研究し言外の意味までも發見して非常に感心することあり故に文章を讀む者は先づ作者の面を知るを要す古人の文章は決して讀むべからず何となれば古人は面を知り難ければなり地方の人士よ先づ東京に來りて三田氏に面會せよ大江氏に面會せよ未だ面を知らずして唯其文章を讀むは愚の至りなり。

第六　文章家は猶庖人のごとき乎

余の說に反對する者あり曰く君子は庖厨を遠ざく、讀者は文章家を遠ざけざるべからず文章家の風采を知り住居を知り生計の度を知る時は外形に拘して眞假を定め難しと此說も亦一理あるに似たり。

第七　自稱道德家に

妻子を持てる自稱道德家往々少年男女を戒めて曰く汝等意馬心猿の狂ふに任かす勿れと今日の少年男女決して無智無識に非ず眞愛と痴情との區別位は明白に知り居れり最も恐るべきは少年男女の父母が其子女をして貧賤なる子女と婚せしむるを厭ふが爲めに他の功名心利慾心等を激昂して往々政治社會商業社會等に波瀾を起さしむるに在り今日の道德家が注意すべきは少年男女にあらずして少年男女の父母に在り。

○御代の春　　今井慶松

長閑なる、春の海原見渡せば、釣する海人の糸霞、ひくや小舟のなは手みち、松の梢にかゝりしを、天津乙女の羽衣と、立より見れば千歳ふる、其友鶴のなき連て、げにも妙なる山人の、衣さみほの松原や、晴しら雪のふじが根に、昇る朝日の輝きて、心もはるゝ朝なぎの、波もしづかになだこゆる、出舟入舟帆を張りて、これさへ田鶴のむれあそぶ、姿にさゆる春げしき、げにゆたかなる御代にぞありける。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

開書

○田村武治の君に同意　（大坂）豊里居士

今年六月の頃なりし余の初めて君に靜岡に拜するや幾多の期望を以て女育の業を我地方に興されんとを約したりしも天、之を許さず再會亦甚だ容易ならず爾來君の雜誌屢々誌上に顯れ君の手簡再三落手すれども何となく殘り惜しく感慨の念甚切なりし然るに前々號の誌上に圖らずも君の女學子に寄すの一文あり文簡なれども能く眞情を盡し滿腔の精神紙上に溢れ恰も君と面り會するもの丶如く轉た余を慰めたり且つ地方女育の事深く余の賛同を表する處なり余も貴說の如く寧ろ實用的の婦人を養ふ事肝要ならんと信ず余の私案には極めて簡易なる學校にして二三年を期して邦語を以て一と通り普通學を授けるものとし而して今日の女生に比しては遙に優りて充分邦文に通じ好んで社會の時務を知得し又之を處置する位の知識徳性を備へしめ傍はら技藝を敎へなば其精神は愈々高く活動し其動作は益々近く實用に適し普通の婦人として社會に出るも決して恥かしからず却つて今日の卒業女生よりは優等の人物を出すと敢て難からざるを信ずるなり而して如此組織なれば學校の經濟も亦容易にして地方の狀況に切に適當すべし余は君の兵役終るの後、活潑なる身体と下情に熟通する愛憐の精神とを以て君の意見を實行し給わんとを切望するなり余が如きもの云ふに足らざれども地方に僻在して敢て東都の榮華を欲せず他日君の驥尾に附して働く事も亦出來得べしと信ず今や分權自治、女子敎育の空論者甚だ多くして實行者更に寥々たり偶ま有爲の士あり之に托せんとせば其人遲々として曰く爾三年東京に已むべからざる仕事あり曰く不適任なり曰く面倒なりと而して地方を顧みず女子敎育を外人に放任して顧みず嗚呼獨り地方を如何せん獨り女育を如何せん弱を扶け苦を慰むる古昔の勤皇士今爲くに在る吾兄田村君願くは自任自重靜に他日の準備をせられんとを感慨の餘り聊か微意を陳して誌上を汚す。

○水林問題に付きて

二人の寄書あり、特に其一人農林學校內愛林生U、S、氏は極めて精密なる論を寄せて吾人が論に賛成せられたり、悉さく掲げたけれど、何如にも余白少なければ、其大略を抄せん。

一　獨乙國の調には林地は降雨の二割三分を樹葉にて支へ七割七分を地面に下すと、左れば樹葉に雨水を留るといふは明白にて、隨て風の爲め吹落さるゝとも大ならん。

二　林地に降雨多きは無論にて獨乙國の調に由れば、平地よりも一割二分半乃至三割方多く、九百乃至一千メートルの高き山林にては平地より八割四分二厘六降雨多し、明證多し。

三　林を伐りし爲め大害ありし決果は、ナイル河畔、佛國プロバンス、墺太利、伊太利等に實例あり。

○男女多少、家族大小

松花翁と云へる人、去年十二月三十一日調日本全國人口表に據り、左の一表を製して、男女の人數に過不及ある所以、及び一戸人數に多少あるゆゑんの何に因れるやを問へり。

		男女の孰れか多きもの　人	一戸ノ人口
東京	男	一五、〇七九	三、一一強
京都	女	一、九三八	四、五五
大坂	女	六、〇〇二	四、四五
神奈川	男	二、二七七	五、〇五
兵庫	男	二三、五八〇	四、八七
長崎	女	九二七	五、〇五
新潟	男	二〇九	五、七四
埼玉	女	五、六〇六	六、一九
群馬	女	一、八四三	六、四〇
千葉	男	六、四九三	五、五九
茨城	男	八、六二一	五、八五
栃木	男	七四八	六、一九
奈良	男	一、五八九	五、四二
三重	男	二、七〇七	五、〇九
愛知	女	六、二四一	四、四六
靜岡	男	一一、四四二	五、四六
山梨	女	七二三	五、五六
滋賀	女	六、四二一	五、一五
岐阜	男	一八、三三七	五、一一
長野	男	一〇、八四一	五、〇五
宮城	男	二〇、一九七	六、五六
福島	男	一七、四〇九	五、九六
巖手	男	一九、四三一	六、〇八
靑森	男	一五、二五五	六、四七

		男女の孰れか多きもの	一戸ノ人口
山形	男	八、七五三強	六、七三人
秋田	男	三二、三六一	六、二三
福井	女	一、七一八	五、四八
石川	女	二、四〇八	五、〇九
富山	男	三、二九二	五、〇二
鳥取	男	六、八四一	四、九一
島根	男	一四、五三五	四、九三
岡山	男	四三、九五〇	四、九三
廣島	男	二五、二三〇	五、〇三
山口	男	一六、二六九	五、一一
和歌山	男	八、五二四	四、九三
德島	男	五、七三二	五、一六
香川	男	一三、〇七八	四、九〇
愛媛	男	一六、八〇三	三、二〇
高知	男	二四、五九〇	四、四七
福岡	男	一六、九八一	五、五五
大分	男	六、二八四	五、二三
佐賀	男	九、九九六	五、四九
熊本	女	四、一〇一	四、九五
宮崎	男	八、四三八	四、八七
鹿兒島	男	七八〇	四、八二
沖繩	女	二八九	四、八三
北海道	男	四、六三九	三、五〇

文詢

(一。)年比ろの娘がまだ緣付かずに居ろほど親の心配はありません、昔し風の緣談にも故障あり、余り開化すぎても親類が苦情申しまする、如何いたすが宜しからん皆樣のお考を乞奉る(靜岡山根毋)。

(二。)下婢の使ひ方には、ほと〱困り入ます、何か御經驗のお心得方あらば成るべく廣く教示を願にあん(加州金澤鶴本)。

(三。)私方の娘は日々或ろ女學校へ通學致し升ろが兎角家内の事を存じませず、教へますれば面倒がりて少しも覺えませぬが左りとて女學校を止めさす事も出來ませぬ、何如かして片瑕物に成らぬやう教へ方はありませぬか(神田甲乙として)。

右三の問は廣く讀者方に問ひ參らす、一々お答を寄せられたし、兎角お互に質問なされたき方は「交詢」として此の欄に向け寄せ玉へ(と女學記者申す)。

●顏は美しくする法は何如にとの問、色々ありましやう、特に色を白くする秘傳など種々のやうです、然し第一の明法は心得方を淸く高くするとです、心の善き人は顏色自づから優美にして金や玉を以て飾れるには千万倍の姿があります、昔しクリストは山上に於て形が變つたと言ひますが、若し天の事を思ひ、神に近づくの念が熾んになると、顏色光りかゞやきて天使の如くになるです、夫故御婦人方が顏ばせを美しくする最上の法は心を好くするの外にないです、ロメ入り道具に鏡を持たせた古人の考も全く之れで、角を出すな齒をむくな、腹を立てると左程に見惡いぞと敎へた親切の姿見であります●伊豆中郷學校の久子君、鈴木大人の文法ロ授松屋主人の消息文例は所持すれど其外にて簡易な四季贈答の消息文は何かとのお問、差當り大野定子の女用消息文が宜ひでしやう、上下二册大本和綴で小林新兵衛發兌です●乙女娘、米でパンを造りて見たいとのお問、其法は米一升、麥粉二升の割にて用意し、米を通常の如く煮ろか又は乳を混ぜて煮、飯となりたろを能く舂き碎き粉に混ぜてコ子、之にモトを湯又は乳にて溶きたるを合せ例の如くにして燒くのです●横濱學校の一女生君、最も高き山の問、日本ならば無論富士山ですが、世界中でならばニウギニアのヘルキウル山でしやう、高さ海面より三万二千七百六十二英尺あるとのとで、昔しはヒマラヤ山峯中のエベレスト山が最も高いと云はれたが之よりも更に高いと三千七百八十一英尺です、七年前より初めて世に知られたので之を公に論じたは英國のカプテン、ラウソン氏が最初です●丹波龜山の松木夫人、菌の有毒無毒を知る法の問、古來色々に申來りて多くの法は有ますれど、餘り當に成らず、共に煮たる銀が黑くならば毒也、家畜の食はぬは毒也、餘り軟らか過ぎ若くは硬過ろは毒也、乳の樣な汁の出ろは毒也、裂又は斷あろは毒也など申せど必らずしも一切左樣にあらず、然し此等は皆な有毒の說ゆえ若し斯ろ事あらば食べぬが第一の用心に候半、特に菌類には毒の宿り易きものゆへ是迄餘り人の食用せぬものは一切食べぬが最上の心得にて候●レビット夫人の事は前號の社說にて初て見しとて問合さろゝ向あり、夫人は六年前即はち千八百八十三年に家を出で、米國の田舍地方に遊說し、翌八十四年十一月十五日桑港を發してハワイに渡り、之よりニウジーランドに行き、翌八十五年一月ホノルゝよりアウクランドに行き、アウストラリアに行き、抆て八十六年(明治十九年六月一日)橫濱に到着し、東京、西京、岡山、長崎を經て、支那に行き、サイアムに行き、シンガポールに行き、ベルマー、セーロン、マダガスカル等を經て英國迄で廻わり居らろゝにて言ふ迄もなく禁酒事業を滿天下に遊說せらろゝのです●」

速記は若林玵三氏方(神田小川町六十二番地)及其外にても教授せられますが、特に婦人へ教授せらろゝは下谷車坂町七十一番地の佃氏方女子速記研窮會です。又速記者は府下丈にても六十餘名ある相です、夫々の宿所附は速記彙報と云ふ雜誌第十二號に見えて居ます●」

雜録 (十九日脫稿)

○小說及び小新聞

加藤弘之氏は、其天則第九號に於て「小說並に小新聞の監督を嚴にすべし」の一篇を掲げ、數年前より西洋流の小說俄に流行するとゝありしかども固より名著作家の俄に出づべき道理もあらずして猫も杓子も小說家となれる有樣なれば數十百部の小說中見るに足るべきものは誠に僅々のとにして概して小說の大眼目たる高尙優美の情感を誘起するの力もあらず唯々平々凡々殆んど小說の名を下すに堪へざるもの多し、と歎じ、特に小新聞に日々掲載する續物が、世の子女を害するの毒、虎狼よりもコレラよりもチブスよりも恐るべしとなし、今后新聞紙條例第三十三條、出版條例第二十五條を犯す

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

もの即ち猥褻の新聞圖書を出版發行するものを禁ずるの條例は、更に嚴に斷行あるべしと勸めたり。近時文書上に於ける道德に注意するの聲いよ〳〵高くなれり、謹みて賀す。

○妓樓全廢の大勢

上毛青年聯合會の諸君は、其議決せし如く果して廢娼の美運動に着手したり。去十六日には下山勇司、宮崎鍬二郎、住谷八朔の三氏は遊說演說の爲に甘樂に向ひ、同十七日には二手に分れて一は高崎、倉ケ野、板倉、安中、原市に到り、一旦歸社し、他の石嶋良三郎、住谷八朔、小見道三郎三氏は、十六日に新田郡尾島驛翠陽俱樂部の演說に臨み、十七日には島村境町、伊勢崎町等に演說し、一旦歸社の上、同日玉村に開設する廢娼政談演說會に臨み、又下山、住谷、佐和釧太郎關根元哉の四氏は廿日寶田の廢娼演說會に臨み、翌廿一日には、石嶋、渡邊（金二郎）宮崎、小見、下山、關根、住谷、佐和等の諸氏板鼻の廢娼演說會に臨まれたり、特に玉村の如き、板鼻の如きは、妓樓櫛比の地あるにも拘わらず、其地の有志者は續々廢娼の建議を贊成するに至れり。

○不德の罰、昭々

塚越芳太郎氏が「上毛之青年」第十一號に附錄したる、非賣淫公許論は、極めて精細綿密に其不可なるとを痛論し、中に數多の確實なる證表を擧たり。賣淫を公許せる國には、公許せざる國よりも私生兒多し、之れ妓樓を全廢すれば密賣淫を增すとの掛念を打破するに足る、

賣淫公許せる三縣（神奈川、愛知、長崎）の私生兒

	人口百に付私生兒比例	公生兒百に付私生兒比例
二十年	〇、一二二	四、四七一
十九年	〇、一〇四	三、八五一

賣淫公許せざる三縣（岐阜、和歌山、鹿島）の私生兒

	同前	同前
二十年	〇、一〇一	一、四六一
十九年	〇、〇七八	三、五六二

賣淫を公許せる國には、公許せざる國よりも密賣淫の犯罪者多し、之れ妓樓あれば密賣淫を犯すもの少なしと主張する人の說を打破し十分の力あり。

賣淫を公許せる三縣（神奈川、愛知、長崎）の密賣淫犯罪者

	密賣淫犯者	人口百ニ對スル密賣淫犯者
二十年	〇、八六八	〇、〇二二
十九年	一、二六一	〇、〇四二

賣淫を公許せざる三縣（岐阜、和歌山、鹿島）の密賣淫犯罪者

	同前	同前
二十年	〇、三五八	〇、〇一〇
十九年	〇、三九九	〇、〇一六

賣淫を公許せる國には、公許せざる國よりも犯罪者多し、之れ人民の不道德となり、貧窮となり、亂暴となるとを證するものなり、妓樓あるを以て罪人を多くしつゝ、妓樓は盜賊を召捕ふるの便とあると云ふものは、抑そも非常に慘酷ある論者なり、

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

賣淫を公許せる三縣（神奈川、愛知、長崎）の犯罪者

二十年	犯罪者	二三五七九	人口百ニ對スル犯罪者	〇、〇七六〇
十九年		二四二五八		〇、〇八一〇

賣淫を公許せざる三縣（岐阜、和歌山、鹿兒島）の犯罪者

二十年	同前	一二三二〇	同前	〇、〇四九一
十九年		一一七六八		〇、〇四七六

明證赫々、天日を見るが如し。

○妻自殺す

熊本縣下賢木村の有志者、梶原蜂雄氏の妻ちとせ夫人自殺したり、夫人は同地方紫溟派の熱心家立花昇氏の姉にして學問一と通り備わり氣力ある女性なりしよし、而して其自殺は主も良人に政治上の事を諫勸せん爲にて在りしと云ふ。

○裸美人を葬むる

十一月十五日は一の記臆すべき日なり、即はち「美人湯上りの圖」「浴后のおもかげ」「浴場美人の圖」等皆な、風俗壞亂の名を以て發賣頒布を禁止せられたれば也。

○物慘き見世物

同じく又た慘酷なる見世物は禁ぜられたるが如し、彼の妙齡なる乙女が蛇を食ふの類の所作は、最早東京横濱に於て興行するとを差止められたり。

○新聞社と義捐金

各新聞社が繁忙極まりなき間に於て能く慈善の事に關係し、本年各地の悲慘なる水害に向つて義捐金を募集したるとは、官民彼此ともに起つて鳴謝すべき筈の事也、左れば各府縣の知事は丁寧懇切なる禮狀を送り來り、新聞社は之を其紙上に掲載して義捐者に報告し、吾も人も見て之を明治天下の一美事としたり、實に人は困難に臨まざれば相救ふの念なし、大厄に會して人間の美質を現わすや著じるしと云ふべし。

○願の趣聞屆く

扨て兵庫縣知事が「日本」新聞社へ答へ、同社が其紙上に廣告したる文面左の如し、

水害地義捐分配金五十錢費而相添へ兵庫縣へ発送り候處同縣知事より同書面へ左の通り記載の上回送有之候間此段義捐出金諸氏に御報道申候也

書面願之趣聞届く

明治二十二年十一月九日

兵庫縣知事内海忠勝　印

○林欽次氏

前年三民權家の一人など稱せられたる、芝區狷直の志士林欽次氏は、東京府會が昨年の通常會に於て賦金を減額せしは賄賂を取れるか、取れるものに唆のかされしか、又は誘導されたる爲に議決せし者にて正當の議決に非ず、府知事が之を認可せしも一時の誤に出てしとする外なし、扨て賄賂を取る議員は福地武藤の三氏に止まるとするも、之が餘瀝を啜り、又は自ら啜らざるも彼等が擧動を默視して不正の發議に同意

せし上は、東京府會は全躰に不潔破廉恥の汚名を辭すると能はず、此の如き不潔破廉恥の府會に於て議决せし諸税を負擔するは全府民の安んずる所ろにあらねば、東京府知事は宜しく其監督權を以て前の認可を取消し府會を解散し新に淳良潔白なる議員を撰しめ正當なる議會となすべしとの主旨にて、先づ之を東京市會に計りたるに市會に於て何の挨拶もなければ、更に府知事に請願されしに亦何の沙汰もなかりしかば、遂に府知事を相手取り、賦金減額認可施行の取消請求の訴を起されんとする由。

○賄賂事件報告

吾人は今日に於て東京府會全躰を疑ふものに非ず、況んや其正當なる採决法によりて議决したるものをや、又况んや福地武藤の兩氏は既に去れるをや、只だ吾人は府會賄賂事件調査委員が、速かに其報告を公開せられんとを望む。

○困難續々

人世は兎角儘ならぬもの也、此丈と思へば亦た次の此丈を生ず、アレ丈けと思へば亦次のアレ丈を生ず、調和又調和、權衡又權衡、人世無窮情實を以て終らんとす、宋の詩人歌つて云く、雲歸時帶雨數點、木落又添山一峯。

○時題流轉

我同胞は佛蘭西人に似たり、何んぞブーランセー派の怪人物を所望する甚はだしきや、何んぞ一事物に執着せず轉々流れ流れ／＼て變化するの甚はだしきや、其容貌漸く瘠せ乍ら漫に豪傑を氣取り又た英雄を崇拜し、誰か頭に戴くものなければ少しも進まず、戴かれしものも只だ行掛りにて運動せるなり、彼等が八釜しきは熱心あるに非ず、他を見るの暇なき也、政治にても、交際にても、文學にても、一つ流行れば乍まちに寄り附き、只だ眞似るとの遲からざるを勉む、斯る國には一事業を成し易し、亦た破るとも易し、英雄に爲り易し、亦た爲れぬとも易し、嗚呼佛人よ、ブーランセーよ、英雄崇拜者よ、何んぞ汝等の意氣地なき。

○刺客傳

「日本人」は其第三十五號以來、刺客略志を連載す、傍に引して、順逆正邪固より問ふ所に非ず史紀の跡に徵して以て殷鑒と爲す耳と云ふ、然れども今日は果して刺客傳を掲ぐるの好時節ありや、特に時事を論述するの「日本人」は此の舊史料を編纂するの重任ありや、「日本人」の社中嘗て决鬪の係を造れり、之よりして决鬪紛出現に大森村事件に關する前日の

騒雜ありしに非ずや。「日本人」の編者たるもの、公義大道の爲に少しく三省して可也。

○女　報

○看護婦人卒業　赤十字社内に設置しある婦人看護會にては來る十二月初旬十餘名の卒業生を出す筈なるを以て同八九日頃同會貴婦人臨場の上修業證書授與式を執行し右の內數名は醫科大學附屬第一第二醫院へ看護婦養成の爲め教員として雇入れらるゝと云ふ。

○唱歌教員　今回東京府廳に於ては唱歌教員試驗を執行せしに合格者は河合千代子須磨てい子外四名なりしと云ふ。

○慈善音樂會　山勢松韻氏其他の諸氏は去る十七日盲啞學校へ寄附の爲め淺草須賀町鶴遊舘に於て音樂會を催ふせしが來會者六百餘人にして頗る盛會なりしと尙ほ聞く處に依れば布哇公使アルウイン氏より金十五圓を寄附せられたる由。

○高等師範學校　にては來る廿三年四月を期し各府縣より女子師範生を撰擧せしに東京府にては四十餘名の志願者ありしを尋常師範學校にて學力試驗を爲せしに合格せしもの十三名にして內八名は築地東京府高等女學校の生徒なりと云ふ。

○故天璋院殿の七週忌　去る二十日は故天璋院殿の七週忌に相當するを以て德川家にては上野の御靈屋に於て御法會を營まれし由。

○母の務　は三島通良氏の著書にて女學雜誌にも批評したり此頃同氏は香川皇后大夫を通し皇后陛下へ献本ありぬ。

○日本女文人列傳　とも云ふべきをグリフヒス氏に賴まれて編纂せられんとす、此に着手ありしは高橋五郎氏也。

○產科婦人科醫　多年櫻井病院に在りし楠田謙蔵氏は府下日本橋區濱町二丁目十七番地にて來一日より開業さる。

○東京婦人慈善會　入塲員は十四日三百十四人、十五日六百四十八人、十六日千八十九人合計二千〇四十三名にて、賣上高合計七千八十六圓五錢。

○朝野新聞女子敎育　の懸賞文に對して百三十七箇の答書あり、其中三箇は二十日以后の朝野新聞に出づ。

○福田會慈愛部　前號に述べたる福田會育兒院改良方立ち如此き部を設くとさなれり。

○天主教の婦人　天主教會內に婦人矜恤會と云ふあり、昨年十月より本年九月迄の報告を見るに、會員九人助員三十人にて、集金百〇七圓二十五錢及古着類數十品又た此の一年內に施惠したる金百〇二圓十錢及び古着類數十品なりと、寂として世に聞えず而して既に多の慈善を爲したり。

○東京婦人矯風會　去二日の議員會に於て可成く速かに事務所を建設する事、アツケルマン孃符受委員十名撰定の事、從來の四部を廢し事業によりて部を分つ事等を議決せしよし、何れも大切なる議決と云ふべし、尙來月六日には年會あり會頭を撰擧すると云ふ。

○東豫製糸傳習所　とて伊豫國宇摩郡有志者二十餘人醵捐金を以て創立し、松山製糸會社より教師を聘し九月五日以后二ヶ月間開塲し、去三日閉塲式を擧げ、教師小田さだ子演說し生徒十一名總代として合田さだ子謝辭を述ぶ。

○婦人演說　重松雅千代と稱し東京下りとて越后直江津にて演說會を開き、「男尊女卑宜しく平一幅對」「法律作用及經濟作用」の二題を演述せしよし越佐新聞に見ゆ、聞しとなき名也。

○名古屋の女子　に關しては吾人も前年一言したり、去十一日の美濃新報は「名古屋婦女子の醜態」と題して甚しく此を論述したり、其地の有志者宜しく大に盡力あるべし。

○大祭日と宣教師　前號に金澤英和女學校の事を述べたるが其時掛合に行たる人は金澤學術研究會長猪瀨藤重なりしよし然るに同校長が遂に其大祭日を休まざりしかば細に顚末を記して北陸新報に投じぬ、之により同新報は去三日の紙上に於て社說に之を論ずるに至れり。又同樣の事には天主教派の女學校にも意見背樣の者を送りし人ありしが尤も同校は夙に大祭日を休み居れり。

○女代人　昨年メソヂストの年會に女子は議員とすべきや否やの議論熾んなりしが、此頃ろバージニアのハーメース、ヘリーに在りし米國自由浸禮教會の每三年大集會には、九名の女議員出席し万事同樣の取扱を受たり。

○日本授產塲の評判　ボストン女學雜誌紙上に出でたり、云く少しく奇なる英文なれ其主旨善好なりと、此は盞佐々城女史等の發起に成れるものに付て云ふ歟。

○万國基督教婦人會　は隔年每に開かる其第十回は十月二十二日より廿五日迄バルチモーアにて催うされたり。

○六万五千部　の發兌に達したりと、ユニチンシグナル（米國婦人禁酒會機關）は其十月三日分に廣告したり。

○米國の花　米國人が如何なる花を好むかとて入札せしめたるに金枝草六割七分、卯月花二割一分、月桂樹三分半、蒲公英三分、ひまはり一分、ひあぎく一分の割合なりし由。

○新誌

時事新報 十三日 天下太平、敵なきにあらず●十四日 鉄下年間●十五日 皇族と政治●十六日 日本社會尚ほ若し●十八日 自ら任ずる者は亦自ら省みる可し●十九日 十津川郷士民の移住

讀賣新聞 十三日 二流半論●十四日 横濱市會解散に就て同市民に勸告す●十五日 外務大臣の適任者は誰ぞ●十六日 輿論をして公論たらしむるは學理の普及を計るにあり●十七日 玉座の背後に權力を存せしむべからず●十八日 中止論者に望むこと切なり●十九日 決闘論

日々新聞 十三日 尋常の救濟は平生の事のみ●十四日 昨は山縣伯を待ち今は井上伯を待つ●十五日 國民の元氣は作興すべし撓或の精神は鼓舞すべからず●十六日 唯だ國家あるのみ●十七日 藩閥の弊害は現狀を見て證明せらるべし●十九日 法律上の制裁と道德上の制裁は社會の進歩と相作ふとを免れざる歟

報知新聞 十三日 天下後世に愧る所なし●十四日 近時の日本に於ける暗殺者刺客の系統●十五日 接前●十八日 孰れを先にし孰れを後にすべき●十九日 接前

東京新報 十四日 決闘、殺人、脅迫●十五日 探偵の審美人●十六日 政黨新聞の流弊●十七日 政黨相爭ふの作法及び行政官の之に對する心得●十八日 接前

毎日新聞 十三日 井上伯阪京の途に就く●十四日 日本政府部内の雜局●十五日 接前●十六日 接前●十七日 接前●十九日 接前

朝野新聞 十三日 紳士●十四日 非條約論者の徑路如何●十五日 伊藤伯の美德●十六日 井上伯の歸京●十七日 延期二字は以て新政府の政略と爲すに足らず●十九日 横濱熊本に於ける二大慘事

政論 十三日 人心激昂の本源●十四日 時事新報の藩閥政府論を讀む●十五日 吾等は内閣の忠臣なり●十六日 政府要路の諸公に一書を呈す●十七日 承前●十九日 政治世界と商工業世界

日本 十三日 九州改進派の委員會●十四日 善後策如何●十五日 承前●十六日 承前●十七日 承前●十九日 恩讐相忘るゝの時

○新刊

農工商　一冊三錢　京都上京兩替町　殖産社發

燒點　一部三錢五厘　金澤横安江町　推銀社

「農工商」は國運大改進の氣運に連れ三業の依然として舊套なく改進なきを歎じ之を救治せんとて世に出でしもの也●「燒點」は有志會雜誌の改題したるものにて學術を研究し教育の普及改進を圖る有志會より發兌するもの也。

○時事新報、重きを北海道に置くべし

猛將勇卒四方を窺ふに當り、徳川政府ハ安然として眠れり、此時獨り卓然として大志を抱き、天保年間冬滿穴熊の間だに、風に大勢を看破して北海道將軍たらんとしたるは、源烈公の偉人たるゆえん也、今や政黨の爭闘漸々として万人只目前に局促す、絶えて遠大洪望の徒あるなし、此時に際して烈公の遺文を讀む極めて快ちよし、時事新報記者が之を論ずるを聞く亦甚ただ快ちよし、方今の壯士何んぞ大奮せざる、蒼茫たる北海の沃野は満腹を擴ろげて諸士を抱かんとする也。

○憫れむべし、彼のアイヌ人

自哲人の暴逆を憤ふるもの、未だアイヌ人の憫れむべきを思はず、彼の英雄の相貌を具して胸に知文字の識を印せず、昔し嘗て日本全土に充滿し、驍勇ともなりて剽悍無双なりしが、一と度び皇別の日本人種に驅逐せられてより、方者いよ〳〵劣敗し、今日にては只だ碧谷の水、砂流の流に沿ふて小一萬の土人遺存するとさなれり。友人湯谷保羅之に依頼するの衷志あり、吾人深く其博愛に感激し、吾聞隠に此の末路蔑滅の種属を憐まんとを祈り居りたるが、志賀重昂氏は日本人第三十五號に於て「我れにコリッツク軍を編成するの材料あり」と題し、アイヌを用ゐてコサック軍隊を編成すべしと云へり。事の俄かに行び難きは暫く措わず、吾人は其着目の甚だ善秀なるに服す。

○自ら任ずる者は亦自ら省みるべし

三四箇の政府當局は諸生の忠告を遵び其背の人に効驗多かるべし、兎角世の中に英雄がる人の多きによりて、不平多し、天下もし謙遜の人満つれば万事談笑の中に相濟むべし、ビスマークすら代る人あり、グラッドストンすら後嗣あり、喩へば相撲の関取り芝居の千両役者の如く、其局に當るときは千万喝采の中にありと云へど、一と度び役を引けば後に代るもの幾らもあるべし、此の一の覺悟は獨に雲上りやん事なき方々に對してのみに非ず、大學の先生方と云へども、陸海軍の諸英雄と云へども、又た新聞記者御自身と云へども、同様に心得置れて益あるならん。

○勝安房伯、西郷大久保木戸三傑を評す

文第九號に載せたる、勝伯氏族の記録中に云く、

古より邦家の爲に大勳あるもの令終を得しは甚稀なり、維新の際大事に任じ大議を決し斷然不顧、其の能に矜らず其の功を思はず洪業成るに當て其の餌事は人に任じ、忘るゝ如く知らざる如き者は予西郷氏に於て之を觀る、之に次で大久保氏木戸氏あり共に一世の雄、然りといへども西郷氏に比せば亦降る事數等、兩氏が爲す所非常にして竭況すべからず、是を以て竊に忌憚せられ其の説反して、諸官と相合はず、西郷氏は然らず自ら人を評して云はく彼には余に勝り亦予の及ばざる所なりと經へて介意の事なし、其の識大度蓋一世にして嬉び知るべけんや」と。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

甚だ好し、惜むらくは大久保木戸兩氏を比較して之を評判せざることを。

○小中村清矩氏の國學

國學、國文の漸やく興り來らんとするは喜こぶべき者也、此際特に頑わしきは、先達の和學者が公平にして進歩したる議論を公にして廣く世上の注意を引くるゝに在り、小中村清矩氏が日本文學第十五號に載せられし「國學將來の目的」一篇の如き、能く此の切要に應へるものか。云く、國學者やゝもすれば其學の振興せざるを歎息すれど從來の儘にては迚ても振ふべき期なからんと思はる……時勢に從ひて舊習を墨守せず斯の歴史言詞の學を以て實業に運用し今世の公益たらしめんと思ふ、と。

○世の變、及び氣の變

島田君條約改正論及び補論正に畢れり、吾人が服する箇所少なからずと云へども、特に其補論の結末に服す、曰く、國民多くは外事の變ふべきを言ふ予は却て内事の兆候良好ならざるを患ふ也今日の紛擾は外より來りしに非ず外事の熱に醉れて内國封建の餘孽が萌芽せしものなり、予は外事の急を患へずして却て内治の整肅ならざるとを患へ外人の門戸を叩くを患へずして兄弟の牆内に鬩ぐを患へ外邦の強項を患へずして私情の爲に國事を荐する者あるを患へ海外異元素の混入を患へずして封建藩閥の餘孽時に臨みて蔟興するを患ふ若し予の言を解せざれば請ふ心眼を開きて今日政海の深底を看よ一と實に然り、吾人亦た深く我同胞の相爭ふを歎ず、國民幹通の同情同愛に訴ふるもの今ま何處にありや。

○國民を温和しくする論

時務評論第三十二號（本月十五日發）は亦た奇論を吐けり、其國民の氣風を溫和ならしむる方法は、政治家が爵位などを競きて意張らざる事、政治家が謙遜其下等社會とでも交際する事、新聞集會二條例を除く事、國民にも選擧權を與ふる事、暗殺者を神社に祭るなどの誤りをなさざる事、聰明なる政治家は時勢の代表者たれば之を殺さんとするは時勢を殺すことなるを[illegible]に教ゆる事、學者新聞記者が公平なる人物論を爲す事、子女を狡猾佞奸浮薄界屈なる人物と婚せしめずして質朴篤實剛毅潔白なる男子と婚せしむる事に在りと云ふ。固より壯大の方法にあられざ細かに人情を穿てるの明法なりとす、蓋し多情多感の才子世に優待せられざるときは即ち如此き奇策を出す、時事新報の記者云く、凡そ公平なる議論は世に不平あるものより發すと、此論の如きは即はち失意多恨の人より發するもの歟。

週報

○官令　去る十二日法律第二十九號を以て徴兵令中改正の件を裁可公布せらる●去る十五日勅令第百十七號を以て陸軍戸山學校條例中改正の件同第百十八號を以て陸軍懲罰令改正の件を裁可公布せらる●内務省告示第三十八、三十九、四十號を以て風俗を壞亂せる出版物の發賣頒布を禁止せらる●去る十八日勅令第百十九號を以て參謀職制中追加の件を裁可公布せられたり

○宮廷　去る十二日依仁親王御一週年祭を御靈殿並に御墓所に於て行はせらる●菊麿王殿下獨逸國へ留學に付き去十二日御内廷に於て兩陛下が拜謁仰付けらる●皇后陛下は去十四日鹿鳴館に於て開設の婦人慈善會へ行啓あらせられたり●去る十五日兩陛下は近衛諸兵除隊式天覽として青山練兵場へ行幸啓あらせらる●神宮新嘗祭勅使として掌典宮地嚴夫氏は去る十八日出發したり

○政治　各大臣は去る十二日内閣に參集して會議を開きたり●黒田伯は去る十四日大隈伯を訪ひ病床に於て談話せられたりと●各大臣は去る十五日内閣に參集したり●去る十五日司法省に於ては會計上に關する會議を爲せり●熊本紫溟派の人々は去る十四日改進黨員八人に亂暴を爲したり●東京倶樂部員は去る十五日藥研堀なる渡邊小太郎氏宅に於て協議會を開きたり●去る十六日麹町區飯田町五丁目富士見樓に開かれたる政談演説會は中止解散を命ぜられたり

○外交　香港日報に本月七日上海電報なりとて掲ぐる所に依れば清帝崩御の風評あり●佛國公使館にては去る十七日各國公使の夫人及び青木外務次官の夫人を招待して饗應を爲したり

○會社　山陽鐵道線路中姫路龍野間は去る十一日より運轉の業を始めたり●東京灣汽船會社にては去る十四日株主總會を開きたり●横濱電燈會社は去る十四日其筋の認可となれり●北海道炭坑鐵道會社は去る十八日許可せらる

○銀行　川田日本銀行總裁は去る十四日大藏省へ出頭し同行事務上に關する件に付渡邊大藏次官と協議せられたり●岡本善七其他有志者の發起にて資本金二十万圓を以て日本橋區堀江町一丁目へ私立岡本銀行を創立せり●去る十八日加藤銀行局長逝けり

○美術　大日本園藝會第二回品評會は去る十一日を以て閉場したり●去る十三日當園藝會發起人會を田中芳男氏の邸に於て開きたり●日本美術協會は去る十六日常會を上野櫻ヶ岡同會事務所に於て開會せり●農商務省にては去る十八日開會中なる東京彫工會第四競技會へ工藝美術奨勵の爲め金五十圓下賜せり

○教育　文部省にては去る十四日小學令に關する會議を開きたり

○宗教　曹洞宗管長瀧谷琢宗師は去る十一日内務省よりの召喚に依り即刻出頭したり●北畠道龍師は去る十七、十八の兩日小石川表町なる北畠大學院建設地跡に於て佛教演説を執行せらる

○新誌　自由の光は去る十一日解停せらる●東雲新聞は去る十四日解停●馬關新聞は去る十五日を以て發刊せり●やまと新聞は去る十八日解停せらる

○雜報　關西地方の新聞記者中有志の人々は　る十日京都洛東の聚紅館に於て秋季懇親會を催したり●關東青年會發起人會は去る十一日柳橋の万八樓に於て開かれたり●去る十五日内務省に於て市區改正幹事　開きたり●播淡間の海底電線は去る十五日より工事に着手せり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

●生徒募集廣告

本校本科生四十名 別科生三十名**募集ス**望ミノモノハ**至急申出アレ**

規則書望ミノ者ハ郵券二錢ヲ添ヘ御通知アラバ早速贈呈スベシ

明治廿二年十一月

東京市芝公園能樂堂前

私立**東京女子手藝學校**

本校此度新築落成し教則を改良し女子必要の學科を懇切に教授す目下若干名の女生徒を募集す入學望みの方は至急御申込あれ教師は内外人數名月謝一圓束脩一圓寄宿料三圓

横濱居留地山手二百四十四番

横濱英和女學校

看病法講習生募集

年齡滿十九年以上滿三十五年以下夫ナキ女子ニシテ家計上ニ係累ナク常ニ院内ニ宿泊シ專意修業シ得ルモノ五十名ヲ限リ入學ヲ許ス志願ノ者ハ規則等庶務掛ニ就テ承合來ル十一月三十日限リ入學願書ヲ出スベシ

但修業中ハ食餌制服夜具等ヲ給與シ患者ニ附添中ハ日給ヲ給スベシ

入學試驗科目

一　讀書　本院規則書類

二　作文　簡易ノ往復文

三　算術　加減乘除

四　體格

明治廿二年十一月

醫科大學第一醫院

婦女**災害義捐金**は來る十二月二十一日(第三土曜日)を以て第一回募集〆切期限と相定め候に付有志の御方樣は夫迄に本社へ向け御送金可被下候

明治二十二年十一月

女學雜誌社

交詢案内

(催促する勿れ郵券十錢迄れ委細に申來れ)

●雇ひたき方（甲）

- 十二　下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
- 十五　召使　家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む
- 十六　召使　重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり
- 二〇　取締　基督教信徒にて年齡三四十才なる獨身の婦人にして女學校に寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を傭入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者
- 二一　中働　年齡廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
- 二四　召使　年齡十二三才のものにて學事に志あるものゝ學資に差支へ候もの を無給にて雇ひ入れ餘暇に學藝を教へらるゝ所あり
- 二五　召使　十二才以上の小女にて質直なるものを給料一圓にて雇ひ度所あり

●雇はれたき方（乙）

- 六　奉公　地方開發學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學ならば雇はれ度二娘あり無給にて何地にても宜し
- 七　裁縫　年齡廿三にして家内の手助けとならんか爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しさのを其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
- 十三　教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれ度ものあり可成は麴町か駿河臺邊を望む
- 一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
- 二四　奉公　年齡廿二才にして一さ通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
- 二五　裁縫　裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇れたし
- 二八　奉公　普通小學科卒業の者にて(年齡二十二才)產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に產婆術を學び度ものあり
- 二九　奉公　年齡十四歲にて基督教信徒の家(可成は西洋人)に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
- 三〇　通辯　年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辯さして雇れ度ものあり
- 三一　奉公　廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり
- 三五　奉公　年齡十五才の高等小學卒業生にして余暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし

交詢案内に掲載するものにして數月に亘るも雇はれざるものも有之間に御當人にて方向御定めに相成候方も少なからず候間以來は大凡そ三ヶ月を限り本紙上に廣告致候とに決定仕候間左樣御了承可被下候　女學雜誌社交詢案内部

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

歐米各國 時計特別廉價販賣廣告

貴婦人用瑞西國製十五形十八金無双表蓋金剛石入兩面彫刻側器械中心ヨリルビー石入ニッケレト二重鬚 Spiral hair Spring 切落シ天符 Compensated Balance 向ピアンクル Stright Line Lever 龍頭巻懐中時計特別代價金六拾五圓

貴婦人用瑞西國製十八金無双側器械中心ヨリルビー石入シリンドル龍頭巻懐中時計特別代價金二拾五圓ヨリ三拾五圓迄

貴婦人用瑞西國製十八金片硝子器械ルビー石入シリンドル龍頭巻懐中時計特別代價金拾四圓ヨリ二拾五圓迄

貴婦人用瑞西國製銀側片硝子器械ルビー石入シリンドル龍頭巻懐中時計特別代價金七圓五十錢

貴婦人用瑞西國製金着セ側片硝子器械ルビー石入シリンドル龍頭巻懐中時計特別代價金八圓貳十錢

貴婦人用瑞西國製不變色白銅側器械ルビー石入シリンドル龍頭巻懐中時計特別代價金四圓五十錢

佛國新發明不可思義懐中時計銀側特別代價金貳拾七圓同鉄側金貳拾五圓金側金八拾五圓

貴婦人用米國製無双側懐中時計特別代價金廿五圓ゟ五十圓迄

其外男子用金銀鐵ニッケル諸金屬側懐中時計各種

金銀諸金屬鐵各種 金銀指環腕環諸金屬裝飾品各種

ヲルゴール類大中小特別代價金十圓ヨリ四十五圓迄

瑞西別製ヲルゴール風琴リン木琴大皷入軍歌八段特別代價金二百圓

右の品々堅牢なる品相撰み同盟保険證を付し特別廉價を以て御求に應じ候間不限多少御愛顧御用向之程奉願上候此外金銀銅鐵諸金屬時計側鎖指環腕環裝飾品類御注文に應じ確實を旨とし廉價を以て速に調達仕候間是亦御用向之程奉願上候也

但し後日金性等に相違有之候節は何時たりとも無差支納代價を以って御引取可仕候是亦併せて申上候

東京市本郷區本郷二丁目廿二番地

時計商 中山直正

發兌

十月。五日 十九日 廿六日

十一月。二日 九日 十六日 廿三日 三十日

十二月。七日 十四日 廿一日 廿八日

定價

一册。六錢 郵税。五厘 (但府内無郵税)

十册。五十八錢郵税。五錢 (同前)

半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓五十六錢

一年分 二圓六十錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 (廿七字詰) 一回 前金拾錢

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌ハ今後女學校又ハ婦人會杯ヨリ毎發兌十册以上一纏ニ御注文ノ向ヘハ別ニ十册毎ニ一册ハ無代ニテ進呈可仕候

明治二十二年十一月廿二日印刷

明治二十二年十一月廿三日出版

發行所 東京麹町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.56 six month; *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 1B. FUJIMICHO 2CHYOME, KOJIMACHI, Tôkyô, Japan.